

不登校児への対処Ⅱ

心理力動的接近

寺 田 道 夫

はじめに

日本では、すべての国公私立学校を対象に、毎年5月1日付けで学校基本調査が実施されている。調査項目の一つに不登校の実態調査がある。前年度、小中学校で病気などの理由を除く心理的、情緒的要因により30日以上欠席した子どもを不登校の実態として8月の下旬に必ず公表している。1998～2005年の不登校の数は、2002年の134,000人をピークに減少し始めた。しかし、2003～2005年度は12万人の数値を維持し、ほぼ横這い状態にある。

不登校の発生とその原因の解明や、子どもの心の理解に基づく再登校に向けた様々な学校の対処、スクールカウンセラー制度や適応指導教室の設置など国及び地方自治体による不登校対策が試みられているものの、数値の上でその改善に著しい効果が現れないのは何故なのか。日本におけるこれまでの実態把握の方法も含めた不登校問題の理解と対処のあり方を問い直す時代が到来しているのかもしれない。

子どもが明らかな身体的病気以外の理由により学校を長期に渡り欠席する現象は、概念規定に違いがあれ、今日、日本だけでなく欧米や他の国々においても子どもの心の健康をめぐる深刻な問題の一つとみなされている(Blagg,N,1987;David Heyne et al.,2004)。また、不登校の理解や対処については、心理療法の諸理論や薬物医療を背景に、様々な対処や実践がなされ、再登校や予後についても、その有効性が検討されるようになってきている。

日本では、学校に行かない子どもの症例の増加と共に「学校恐怖症」「学校嫌い」「登校拒否」といった用語へと変遷し、今日では身体的疾病以外の理由で学校に行かない子どもを「不登校」という用語でまとめ、欠席理由を様々な項目で

分類している。さらに不登校の概念に、怠学傾向の子どもも含まれる。一方、欧米や他の多くの国々では、怠学傾向の子どもを除外していることも興味深い。もちろん、学校を休み始めることで2次的問題として怠学傾向を示す子どもはいる。しかし、怠学と登校拒否を区別することで、理解の仕方や対処の仕方を明確に区別して対処方法を考えていこうとする積極的姿勢が根強い。

欧米や他の国々では、不登校の概念が用いられることがあるが、それは実にまれで、日本であつて使用されていた「怠学」と明確に区別した「登校拒否」や「学校恐怖症」の用語による調査や症例研究が主流となっている。そのため、欧米やその他の文献を講読し、日本との比較検討する際に読み手に混乱が生じるといった弊害も生じている。また、不登校の用語を区別することは、不登校状態にある子どもの不安や恐怖といった心理的問題を解明し、再登校やその他の自立のための具体的対処を積極的に試みる上で大いに役立つと考えられる。

不登校の対処として近年、行動療法、認知療法、そして、認知行動療法等の適用が注目されている。特に認知行動療法を用いて子どもの再登校を早期に促す対処は、カウンセリングなど他の療法の活用比べ、その有効性が高く評価されている(David Heyne et al.,2004)。このことは、先に述べた不登校の子どもの実態と重ね合わせて、これまでの日本における不登校の基本的な理解の仕方や、早期の再登校を全面に打ち出さない対処法そのものに疑問を投げかけ始めている。

その背後には、中学卒業後も人とのかかわりを回避し、家庭に閉じこもる多くの若者の自立を巡る深刻な社会問題が急浮上しているという事実がある。もちろん、認知行動療法が不登校

の有効な対処法であったとしても、それがすべての事例に適用できるわけではない。不登校となった子どもの心の動きを共感的に理解し、受容的かわりにより、子ども自らが登校意欲を促し、積極的に現実に直面することを支えるための諸理論は、実際に行われて、その有効性が多くの症例として報告されているのも事実である。

ただ、ここで論述的を絞るとすれば、①不登校の子どもの心の動きをいかに理解すべきか、②子どもの心の動きの理解に基づき、どのような対処をすれば、③不登校の子どもがいかに早期に現実に直面、すなわち、再登校や学級復帰及び社会適応など自立することができるか、という3つの視点から、これまで報告されてきた学校恐怖症、登校拒否、そして不登校の事例や研究内容を再検討することが大切ではないかということである。

本論文は、前半で不登校の子どもや家族、そして、それを支援したり再登校に向けて直接対処したりする教師の心の動きにもとづくかわり方、すなわち、心理力動接近による対処のあり方に着目し、これまでの先行研究を概観する。さらに、後半では、この枠組みに基づき筆者が対処した事例の概要を述べることにする。

I 心理力動的接近による対処と今日的課題

1 心理力動的接近による対処の変遷

① 初期は母子関係に着目

不登校（学校恐怖症・登校拒否）の子どもの心の動きに着目しながら、再登校に向けた対処を行おうとする考え方は古くある。特に、不登校の子どもと親との間の心の動きを理解する概念として、心理力動的接近という考え方に基づく対処は、精神分析理論の発祥の頃まで遡ることができる。心理力動の考え方に立って不登校を理解するならば、学校や家庭、その他の外界と、子どもとの間に葛藤や不安、危機が生じたとき、無意識のエネルギーは自我のはたらきかけにより様々な形で現れる。その一つが子ども自らが登校を拒否するといった回避行動となる。

初期の子どもの学校恐怖症の治療的対処は、Fured理論に基づく母子の近親相姦的モデルを拠り所に分析的治療が行われた。たとえば、Yung (1911)は、興味深いことに学校恐怖症の子どもの分析的治療にあたっている。以下はその事例の概要である。

「11歳の少女は吐き気や頭痛のため一緒に登校できなかつたり、朝、ベットから起きることを拒否したりする。分析的対処として完全に子どもに焦点を当てる。少女の問題は、男性の教師に置きかえた近親相姦の用語で考察された。少女の家族は、少女と親との関係に気づいてはいなかった」(Blagg,1987)

つまり、Yungは、学校恐怖症を親子の近親相姦的關係が教師に投影されるという枠組みで理解し、子どもの分析的治療を行っている。このように、欧米における初期の理解は、無意識及び意識、性的欲求の阻止と教師への投影、そして、分離不安といった心理力動的概念を用いていたことが分かる。もちろん、当時は、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の理解や対処に父親の果たすべき役割や子どもとの関係性は重要視されていなかったことも興味深い。なお、母子の密着した関係性が、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の一因としてとりあげられる風潮は一世以上経た今日でも根強い。

② 父親や他の家族の関係性の重視

Bornstein (1949)は5歳半の少年の事例を分析し、無意識による解釈をするため、親と継続的にかわることの必要性を指摘した。Johnson et al., (1941)は、母子の両者への対処の重要性を指摘し、母子並行面接を導入している。Van Houten (1948)は、母子のアンビバレントな関係を重要視しながらも、両親や地域社会との関係、父親や兄弟及び仲間に対する態度、症状そのものに対する子ども自身の感情を扱おうとした。次第に父親の役割の重要性が着目されるようになり、Robinson et al (1955)は、父親の神経症が子どもの対処に重要な役割があることを述べている。

母親との分離不安など、親や兄弟、他の家族の心理力動的接近に基づく不登校（学校恐怖症・

登校拒否)の対処が主流となっていたが、学校要因に着目し、早期の再登校の是非について多くの論文が取り上げているのも興味深い。たとえば、Talbot (1957)は、「学校復帰のタイミングが復帰の成否を決める」と述べ、学校復帰が不登校(学校恐怖症・登校拒否)の子どもには多くのプレッシャーの危険性があることを力説している。そのため、対処として、1~2学期間は学校に登校しなくてもよいことを認めたり、学習の遅れを補うために家庭で授業を行ったりした。

Davidson (1960,1961)は、部分的な学校復帰を認めることを子どもと契約したり、時間割の変更や転校、家庭での授業の実施、入院や学校以外の場所で対処をしたりして、その有効性を検証した。Chazan (1962)は、転校や読書会など教育的要因も学校復帰に効果があることを述べている。

もちろん、学校復帰のプレッシャーによる精神病の発症を示唆する報告もある(Radin,1967)。そのため、早期の学校復帰を危惧する考え方は根強い。そこで興味深い調査は、Coolidge et al (1964)の66事例に対する5~10年間に渡るフォローアップの報告である。66事例をさらに選択し49事例にしぼり追跡調査を行った。結果的に47事例が再登校し、その後も登校し続けていることを示した。しかし、試験への過剰不安、仮病による欠席などの問題が半数以上の子どもがあることを指摘した。

親に巻き込まれる子どもを分離し対処した2事例を取り上げたLeventhal et al (1967)は、再登校の成功の鍵は「登校しない間に、親子間の対立を解消することで、非現実的な自己像の再評価を促す」というように、家族の心理力動的接近による対処の重要性を示唆している。

Rodriguez (1959)は、早期に学校復帰させるために子どもを家庭から分離することの必要性を述べている。彼は、子どもが示す症状は親のアンビヴァレンツな言動に対する反応と解釈した。そして、親から子どもを分離し対処することで、これまで家庭内で増幅され続けていた親子の不安を取り除くことを試みた。また、子

どもの健康性に着目したり、早期の学校復帰に取り組んだりすることで、家族にも安心感を与えることができることを強調した。さらに、すべての子どもの早期の学校復帰が容易ではなく、11歳を境に学校復帰率の高低が見られることを報告している。

母子分離による早期の学校復帰の考え方は、Glaser (1959)やWarnecke (1964)によっても支持されている。その後、学校復帰が対処の成功の目安といった視点から、子どもの学校場面における情緒や学業達成に関心が向けられるようになってきた。もちろん、Baker & Wills (1979)が指摘するように、学校復帰そのものが子どもの将来における学業や仕事の成否を規定するものではない。

不登校(学校恐怖症・登校拒否)は不安や恐怖といった心の動きだけで理解することはできない。たとえば、Berg & McGuire (1974)やEisenberg (1958)は、子どもの依存性が母親の養育態度によって培われることを示唆している。さらに、母親の過保護や過剰な抱え込みが不登校の一因となることを強調する動きもある(例:Kameguchi & Murphy-Shigematsu,2001;Kearney & Silverman,1995)。また、再登校や子どもの自立について母親と父親が何らかのメッセージを与え続けることを指摘する立場も見逃せない(Bernstein,Svingen,&Garfinkel,1990)。

このように、母親や父親、時には兄弟姉妹や祖父母の様々なかわりが子どもの不登校(学校恐怖症・登校拒否)状態を助長したり、再登校に向けた始動を促すはたらきかけを強調する考え方は注目に値する。

③ 家庭要因と学校要因

近年、子どもを取り巻く教育的環境要因に着目する報告も多い。たとえば、家庭要因として、両親の葛藤や争いによる別居や離婚、そして、時には親の心の病(Kameguchi & Murphy-Shigematsu,2001;Martin et al.,1999)などが子どもの不登校に影響を及ぼすことが強調されている(Bernstein et al.,1999;Kearney & Silverman,1995 ;

Bernstein et al.,1999)。また、両親が揃った家族より片親の家族の方が不登校(学校恐怖症・登校拒否)になりやすこと(Bernstein and Borchardt,1996)。両親の不和と子どもの不登校(学校恐怖症・登校拒否)によって家族崩壊が生じることもある。もちろん、子ども自身の不安や鬱といった心の問題や、学校生活場面の不適応が不登校の一因となることを示唆する動きもある(Elliott,1999)。しかし、Kearney(2001)は、「不登校(学校恐怖症・登校拒否)が、不安や鬱といった他の問題に先行するのか、それとも、それらの別の問題の結果によるのかどうかは答えられない」というように、不登校(学校恐怖症・登校拒否)と上述した様々な要因の優位性について明言は避けている。

子どもの心理力動への影響は、単に家族関係のレベルに留まらない。学校場面における様々なできごとが子どもの心に影響を及ぼし、結果として不登校(学校恐怖症・登校拒否)となる事例は多い。たとえば、学習場面における子どもの欲求不満や心の傷が不登校(学校恐怖症・登校拒否)を助長したり(Naylor et al., 1994)、学業成績を巡る子どもへの社会的プレッシャーや競争が不登校と結びついたりする(Iwamoto & Yoshida,1997;Kameguchi & Murphy-Shigematsu,2001; Okuyama et al.,1999)。

子ども自身に起きる様々なできごとが不登校(学校恐怖症・登校拒否)を引き起こすことも多い。たとえば、Kearney et al (2004)はSmith(1970)、Pkace et al(2000)、Mcshane,Walter,Rayt(2001)の論文を取り上げる中で、小中学校や高校進学、転校、喘息やその他の病気による欠席、家庭内のできごと、いじめなど、時期的なものや突然のできごとが、子どもにとってストレスの原因となり、不登校(学校恐怖症・登校拒否)とつながることを指摘する。

特にPkace et al.(2000)は、いじめが不登校(学校恐怖症・登校拒否)につながることを強調し、「いじめはある子どもにとっては好都合の言い訳かもしれないが、しかし、明らかに他の人たちにとっていじめはトラウマとなって

いるかもしれない」ことを示唆した。実際、いじめは親や教師にとって見えにくく、子ども自身の直接的訴えや外傷的事実がなければ容易にわかりにくい面がある。学校場面の他の要因としてKearney et al (2004)は、テスト、口頭発表、体操、脱衣、宿題、教師の態度(Kearney & Beasley,1994;Leung,1989;Ollendick & Mayer,1984)や休日直後の時期を挙げている。

④ 子どもの自己像や認知の仕方

親子関係と子どもの自己像を基に不登校(学校恐怖症・登校拒否)の心理力動を解明しようとする視点も大切である。たとえば、Leventhal et al (1964)は、「子どもは自分自身のことや成績などを過大に評価し、自分についての非現実的な自己概念を保とうとする」と述べ、親の過剰期待が子どもの自己像を実際以上に膨らませると考えた。そして、このことが、「学校場面で現実の恐怖となった時、不安となり自己愛的な自己概念を維持できる場所へと逃げ込む」というように不登校(学校恐怖症・登校拒否)発生のしくみを説明している。また、Lawrence(1987)は、「家庭で過大評価された結果、歪んだ自己概念を持つ」と述べ、家庭で「良い子」と評価され続けた子どもが、学校場面で担任によって問題児のレッテルを貼られた時、子どもの自己概念を混乱させることを示唆した。

自己概念の歪みから教師と子どもとのかかわりを見ると、多くの場面で子どもの自己概念の混乱または破壊が繰り返行われていることがわかる。子どもは親に反抗せず、乳幼児期から児童期まで親の期待に沿って育てられ、学習面や行動面で親や教師、級友から高い評価を得る。しかし、それが、自分の意志や意識と無関係であることに気付かない。そのため、テスト結果や授業中の間違えた時の教師の言動によって、これまでの築き上げられてきた自己概念が壊されたとき、不安や恐怖心が強まり、より安心な場所である家庭に逃避するため不登校(学校恐怖症・登校拒否)になると考える。

⑤ 最近の不登校（学校恐怖症・登校拒否）理解の視点

さらにまた、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の子ども自身の様々な認知の仕方が、その開始や状態の持続に結びつくことは多い。たとえば、学習面の遅れや級友とのかかわり方に対する子どもの認知の仕方が再登校や学級復帰への不安を高めることもある（奥山；Okuyama et al.,1999；寺田, 2006）。学校を長い間欠席した理由を級友や担任から直接たずねられることに、どのように答えるかはとても難しく（Hyne et al.,1989；寺田, 2006）、そのために、不安や鬱状態となることも多い（Berg,2002）。

かつては不登校（学校恐怖症・登校拒否）と引きこもりは同一とは見なされなかった（例 Baker & Wills,1978;Smith,1970）。しかし、近年、我が国でも深刻な社会問題となりつつある引きこもりと不登校（学校恐怖症・登校拒否）との関係を強調する動きもある。たとえば、引きこもりは、動くことの恐怖の助長や（Smith,1970）、脳腫瘍のような神経学的な病理を含むという（Stein et al.,1996）。また、引きこもりと不登校（学校恐怖症・登校拒否）の早期開始との関連を述べるものもある（Baker & Wills,1978；Silove & Manicavasagar,1993）

先にも述べたが、子どもが不登校（学校恐怖症・登校拒否）となることによって生じる様々な悪循環が指摘されている。たとえば、精神病理の発症や（奥山；1999）、両親の無力さ（Bernstein,Svingen,Garfinkel;1990）、子どもの家庭内での敵意・攻撃性や支配性の強化、依存的母親と無関心な父親といった親の養育力の欠如を強調する立場もある（Lilewise,King,Olle ndick,Tonge；1995）。さらに、親の精神病理が不登校（学校恐怖症・登校拒否）を持続させたり、親の鬱や不安が子どもへの適切な対処を困難にすることが示唆されている（Bernstein & Garfinkel,1988;Bools et al.,1990;Last et al.,1987;martin et al.,1999）。

さらに、不登校（学校恐怖症・登校拒否）を助長する2次的要因は、子どもの心理力動を理解する上で重要である（寺田, 2006）。たとえ

ば、親の関心、TV、コンピューター、愛玩動物、オモチャ、食べ物の獲得、学校の嫌なできごとの回避などが、子どもの不登校（学校恐怖症・登校拒否）状態の持続を強化することが指摘されている（Burke & Silverman,1987;Kearney,2001,Kearney et al.,2004）。

2 子どもと家族の心理力動

① 不登校（学校恐怖症・登校拒否）に結びつく学校場面の様々なできごと

学級や校内の人間関係、学習内容、そして他の教育活動等が子どもに強い不安やストレスを与えることがある。そのため、一時的に不安定状態となり、気分が苛立ち、家族や友達に暴言を吐いたり暴力を振るったりする。中には、万引き、深夜徘徊等の反社会的行動に走ったりすることもある。多くの子どもは、親、教師、友達などの助言や援助によって自己洞察し、その危機を克服することができる。しかし、子どもの中にはそれらのストレスに対応できず、いつまでも固執し続けたり、自分自身が押しつぶされるのではないかとといった危機感を強めるものもいる。そして、その危機感から自己を防衛するため安心・安全な家庭逃避することになる。

それでは、学校場面のどのようなできごとが子どもにとってストレスとなるのかを事例を基に見てみよう。

【いじめ・友人関係の崩壊】

小中学生の多くが悩みの具体的内容として友人関係をめぐる問題をあげている。そこには、いじめやけんかが入る。特にいじめは、遊び感覚で行われやすく、一見、戯れと映るため教師の目には見えにくい。また仕返しを恐れ、いじめの標的となっている子どもや周囲の子どもが教師に訴えないことが多い。そのため一層執拗かつ陰湿なものとなりやすい。このようないじめの繰り返しの中で学校に対する不安や恐怖心を高め、やがて不登校という形で自己防衛することになる。

友人関係に突然亀裂が入り不登校（学校恐怖症・登校拒否）となる子どもは多い。たとえば、とても仲の良かった子ども同士がささいなことから敵対し、特定の子どもを仲間外れにし

たり派閥を作ったりすることがある。また、たとえ仲良しの関係であったとしても自分の意志をはっきり表現できない子どもは周囲に迫いやられる。そのため仲間から拒否された子どもが孤立感や不安感を強め不登校（学校恐怖症・登校拒否）に陥ることもある。

学級内の雰囲気嫌いがさして登校を拒否する子どももいる。たとえば、学級内のボスの存在の子どもがいたり、好き勝手なことばかりをしたりする子どもが多い学級では、まじめに取り組もうとすればするほど孤立し、仲間外れとなる。そのため、学級に居づらくなり、休み時間に決まって教室を抜け出し、職員室や保健室に顔を出したり他の学級の子どもとかかわったりする。そして益々学級への所属感が薄れ、登校を拒否した。

【対教師不信】

学習場面や生活場面の担任の言動に不満や不信感を持ち、担任嫌いを理由に不登校（学校恐怖症・登校拒否）になる子どももいる。一体なぜか、その具体例を挙げてみよう。一つは、自分が差別されたという感情の発生である。たとえば授業中に学習にかかわることを友達と相談していたのに、私語扱いされ、他の子どもの目の前で、叱られたり注意されたり、時には体罰を受けたりすることで自尊心が深く傷つけられる。また、授業中に指名され、間違えて答えた時の担任の一言が子どもの心を深く傷つける。さらに、熱心さの余り、子どもの気持ちや感情をないがしろにした担任の指導姿勢に、反感や嫌悪感、さらに不安を増す子どももいる。そして、期限付きで課題の提出を迫られた時、突如として不登校（学校恐怖症・登校拒否）に陥ることもある。

教師と子どもとの信頼関係が突如崩壊することによって不登校（学校恐怖症・登校拒否）が始まることもある。たとえば、子どもと担任との間の秘密が、担任の不注意から学級で公にされたり、担任の特定の子どもの対する差別的な扱い方が明るみになったり、担任やその他の教師の言動に不一致が見られたりする時である。このような場合、子どもは、担任への親和的感情を失い、不信感を強め、学習意欲の低減や不

登校（学校恐怖症・登校拒否）に陥ったりする。

【学習不安】

学習不安が不登校（学校恐怖症・登校拒否）促進の一因となる場合がある。教師の語ることや学習内容がまったく理解できないことや、テスト結果が子どもの予想に反してとても悪い時。さらに、テスト嫌いから不登校（学校恐怖症・登校拒否）になる子どもがいる。また、子どもの習熟度や家庭での学習習慣の定着度をまったく無視した形で一律的な宿題や課題提示、テストの得点の重視、競争原理を導入した学習指導は、教科学習が苦手な子どもにとって強い不安の源となる。

特定教科に対する苦手意識も子どもにとって強い不安となる。体力的についていけない子どもや表現力に乏しい子どもにとって、体育や音楽といった実技教科や国語は強い不安となる。そのため、苦手教科の授業がある日や時間帯になると保健室に駆け込んだり、時には早退や欠席を繰り返したりする。

【人間関係のトラブル】

小学校低学年では、学校に居る間は学級担任の保護下にあり、級友や上級生とのトラブルも担任や他の教師の早期介入によって解決される。しかし、中学年以降になると、お互いに感情を言葉や行動で直接表出するようになり、校内だけでなく、登下校や塾、地域のスポーツ活動の場までトラブルを持ち込むこともある。このような人間関係のトラブルを契機に登校を拒否する子どもがいる。

また、小中学校では委員会やクラブ・部活動などが積極的に行われる。それらの活動に子どもは、半ば強制的に所属させられたり、自分の興味・関心や上級生及び同学年の子どもの影響を受けたりして加入する。特に運動系の部活動は、練習がハードなため、体力に限界を感じ挫折する子どもがいる。しかし一旦入部したことで容易に退部できないという圧力に不安を感じ、日々苦痛を味わいながら参加することになる。

部活動のレギュラーのポスト争いなども時には子どもを脅かす。それまで一緒に練習して来た友達がレギュラーとなり自分が補欠や番外と

なったことで無気力になることもある。また活躍を期待されていたのに練習中の思わぬ事故で怪我をしたため、活動が難しくなった場合、一転して子どもは学校生活の張り合いを失い登校を拒否することもある。

【転校などの環境の変化】

親の仕事の都合による転居といった出来事を契機に不登校が始まることもある。

事例A：親の仕事の関係で他県から転校してきたが新しい学校に馴染めず、以前の学校の友達が良く思われ孤立する。次第に頭痛や腹痛を訴え遅刻や早退が続き、完全な欠席状態となった。

事例B：親の事業の失敗で、それまでの持ち家からアパート暮らしをしなければならなくなった。そのため子どもも肩身の狭い思いを味わった。学校でも自信が無くなり、すべてに無気力状態となり、登校を拒否した。

事例C：子どもが不登校になったのは担任や学校の責任という理由で、他の学校に転校した。親は「転校すれば登校する」という子どもの言い分を信じて転校手続きを行った。しかし、転校先の学校に登校したのは数日で、再び欠席状態となった。

子どもにとって、転校や転居といった環境の変化は、それまでの人間関係を崩し、緊張感の高い新しい環境場面への再適応を強いられる。このことが大きなストレス原因となる。たとえば、親の離婚や転勤といった子どもにとって納得できない理由による転校や転居は、新しい環境に対する不安を増し、上の事例のように劣等感を増すこともある。また、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の対処として安易に考えられがちな転校の手続きは、結果的に失敗に終わることが多い。

【校則】

制服や頭髪など学校の校則や規則を巡る問題から、子どもが不満や嫌悪感を強め、不登校（学校恐怖症・登校拒否）となることもある。たとえば、厳格な校則内容や校則違反に対する教師間の不一致な対応に、反発や不満を強め、自主

的に登校を拒否する場合や、事前の説明が不十分であったため生じたトラブルから学校に背を向ける場合である。

このように学校生活を巡る様々な出来事が多くの子どもにとって負担と感じられたり不安や不満を増したりする。そして、ストレス状態に立ち向かうことができず、不登校（学校恐怖症・登校拒否）という形で自分の殻に閉じこもることになる。

② 教師と子どもとの関係

【子どもと教師の関係】

学級担任の対応が契機となり子どもが不登校となる事例はしばしばある（寺田,2006）。特に不登校の原因の一つに担任と子どもとの人間関係のトラブルがある。たとえば、担任と気が合わない子どもが「先生が嫌いだから」とか「先生がえこひいきするから」といったことを理由に突然休み始める。もちろん担任はそれほど意識していなくても、子どもが担任に強いマイナスイ感情を抱く。さらに、不登校の子どもの多くは、学級内でそれほど目立つ存在ではなく、むしろ他の子どもについて回りの行動をする。担任が学級の子ども全員を対象に叱った時、自分だけがひどく叱られていると感じる子どもがいる。そのようなマイナス関係にあるとは気づかず、担任が学級で熱心に指導や叱責をすれば、不登校の開始の条件が完全に整うことになる。

学級内でいわゆる「できる子」として周囲から認められている子どもに、担任が過剰に期待したりかかわったりすることもある。そのような教師の過剰な対応が子どもにとって苦痛と感じられ、級友から「いい子ぶりっ子」と見られ、次第に無視され、孤立する。その結果として、級友や担任の前でキレル子を演じたり、時には、不登校となる。

担任の対応がきっかけで不登校に陥った子どもは、不登校開始後に担任のかかわりが積極的になるほど担任を嫌う。たとえば、担任の家庭訪問や電話の応対を断ったり、顔を見せなかったりする。さらに、担任からの手紙を開封もしないでゴミ箱に捨ててしまうといった極端な行動に出ることもある。そのような子どもの心の

動きを理解しないでかかわるほど担任と子どもとの心理的距離は遠くなる。

【教育観や指導理念】

担任や他の教師の教育観や指導理念に子どもが合わないことも不登校の原因になる。たとえば、生活指導と称して子どもの家庭生活に至るまでこと細かに助言や指導をする担任や威圧的指導に徹する教師に、強い嫌悪感や不安、恐怖心を増し、学校を休み始める子どもがいる。

もちろん、担任や他の教師の指導が本当に不登校（学校恐怖症・登校拒否）の原因であるとは限らないことが多い。前節で取り上げたように、子どもの担任に対するマイナスの感情や態度が、家庭の親子関係の無意識的な投影であったり、不登校（学校恐怖症・登校拒否）をすることで二次的利益を得るための子どもの口実であったりする。また、長期休業期間中の家庭での子どもの生活規律の乱れや、親の躰の甘さに起因する場合も考えられる。そのため、他の子どもには平易なことも、その子どもにとって過剰な負担と感じられたり、教師自身に強いマイナス感情を持ったりすることもある。そのような心理力動がはたらいているにもかかわらず、親は子どもの訴えをそのまま受け止め、担任への不信や不満を強めることになる。そのため担任と親との関係が険悪な状態になる。

【教師に投影される子どもの不安】

担任や他の教師の子どもに対するかかわり方が本当に不登校の原因か否かは判断しにくい。しかし親との継続的面接によって、子どもの訴えがその場しのぎのものであったり、母親や父親のイメージと重なったものであったりすることが明らかにされることもある。そのため担任は、その都度、感情的にならず、その場の子どもや親の気持ちや不満をありのままに受け止め、時間を費やして子どもや親との良い関係を回復することが大切となる。

③ 子どもの自己像の歪み

不登校（学校恐怖症・登校拒否）の心理力動を理解する視点として子どもの自己像がある（前述）。たとえば、以下の事例に見られるように、子どもの進路選択と親の期待とのズレや親に

よって作り上げられた良い子のイメージの重圧から、自分自身の生き方に不信をいだいたり挫折したりする子どもは中学生や高校生に多い。

事例D：中学校3年の秋、進学先の高校の決定の時期となり、本人と親が希望する高校にズレが生じた。子どもは、親に自分が希望する高校のことことを正面から言えず、自分で一人で悩まなければならなかった。そして、突然朝起きられなくなり、翌日から不登校が始まった。

事例E：小学校時代から他の子どもたちより多くの時間を勉強に当ててきた。そのため、優等生として教師や親、他の子どもたちから高い評価を得てきた。しかし、中学3年となり、そのような自分の生き方そのものに疑問を抱き始めた。そして、自分の生き方が無駄に思われてしかたがなくなり、学校へ行くことが嫌になり不登校が始まった。

Blagg (1987) は、「子どもが家庭を離れることより、学校場面の特定場面に関係する」(Hersov 1977) といったように、学校要因が不登校の子どもに及ぼす影響を重視する視点を述べている。たとえば、体育などの競技や定期テスト、暗記、スクールバスによる登校や長い徒歩通学距離といったことに強い不安を持つ子どもは多く、それをきっかけに不登校（学校恐怖症・登校拒否）となる事例もあると Blagg (1987) は指摘する。

Ⅱ 開始から終結までのプロセス

1 理解のための枠組み

① 各段階に応じた理解

不登校（学校恐怖症・登校拒否）の子どもをどのように理解するかは、アセスメントや再登校に向けた対処をする上でとても大切である。不登校（学校恐怖症・登校拒否）と言っても子どもは実に様々な様相を示す。子どもが今、どのような様相かを親や教師がある程度、共通

理解した上で、対応を試みた結果、子どもにどのような変化が生じたかを解明できれば、対処に見通しを持つことができる。

たとえば、頭痛や腹痛を訴え、登校をしづり始めたり、頻繁に遅刻や欠席をしたりする。家族に欠席を強要されたり、学習の遅れや進学のことで嫌みを言われたりして、暴言をはいたり、時には物を壊したり親に暴力を振るったりする。外出もせず完全に家庭に閉じこもり、昼夜逆転の生活をしたり、TVやゲームに時間を費やしたりする。少しずつ現実を直視し始めて、外出を試みたり、級友や教師など家族以外の第三者を受け入れたりする。そして、不安や葛藤はあるが、再登校に向けて動き始めるなど様々な様相が見られる。

不登校（学校恐怖症・登校拒否）の開始から終結までのこのような様相をどのように区分するかは、不登校（学校恐怖症・登校拒否）問題を取り上げてきた研究者や心理臨床家によって異なる。

主な不登校（学校恐怖症・登校拒否）の段階説としては以下のものがある。

○佐藤修策（1985） 8段階説

身体愁訴期 合理化期 不安・動揺期 絶望・閉じこもり期 諦観・自己洞察期 回復期 学校復帰期 安全自立期

○甲斐志郎・金子 保（1985） 6段階説

進行の段階（初期 中期 後期）
回復の段階（初期 中期 後期）

○吉村英夫（1988） 5段階説

しづり期 混乱期 模索期 回復期
自立期

○稲村 博（1994） 7段階説

心気症状期 不穏期 無為期 意欲回復期
登校再開期 不完全適応期 学校（社会）適応期

○梅垣 弘（1996） 5段階説

前兆期 初期 進行期 回復期 再登校・社会進出期

これらはいずれも、多発する不登校（学校恐怖症・登校拒否）の子ども臨床例を検討した結果、独自性が見られると共に、登校をしづり

始める時期から再登校や自立するまでの過程で類似した特性がみられることに着目し、各段階を区分したものである。具体的事例に対処する際、単に不登校の一語で片づけるのではなく、これらのいずれかの段階説を参考にして、親や教師、時には直接子どもと面接を行う。さらに、直接的または間接的に語られた子どもの様相から、子どもの心が今、どのような状態にあるかを具体的に理解することができる。また、親や教師によって語られた子どもの様相と共に、子どもにかかわる親、他の家族、級友や担任、学校の相談態勢そのものがどのような様相を呈し、それが結果的に子どもの心理力動にどのような影響を及ぼしているかをアセスメントできる。

このような段階毎の様相を手がかりにすることで、親や教師が子どもの心が今、どこにあるかを共感的に理解したり、子どもが訴える身体症状や了解不能な様々な言動が、登校することや級友、教師、家族に対する子どもの認知や不安、葛藤の現れであることを受容したりすることができるのである。さらに、これまでどのように子どもに対処すればよいかわからず不安となり、場当たりの対応してきた親や教師に冷静さを取り戻させ、今、ここでの子どもの心に寄り添いながら、その段階の様相に応じた適切な対処をする余裕さえ生まれてくる。

もちろん、段階説を唱えるいずれの研究者や心理臨床家も各時期がどれほどの期間持続するかは明言していない。むしろ、各時期を前後したり、1つの時期に長期間留まっていることや、せっかく再登校を始めたのに時には初期の時期に戻ることもしばしばある。あくまで、子どもの心や行動の様相に基づくものである。しかし、子どもの様相だけでなく、親や教師の様相そのものも大きく変容することがわかる。

② 対処モデル

筆者は、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の相談活動に従事し始めた1992年当初、葛飾区の教育研究所のスタッフであった吉村（1988）が月刊誌「教育心理」に掲載した「登校拒否の対応モデル」に着目した。その理由として以下

のことが挙げられる。第1は、1枚の用紙で不登校（学校恐怖症・登校拒否）の開始から終息までの流れが示されていること。第2は、親子の心理力動だけでなく、担任の不安や葛藤の結果として陥りがちな学校の対応の仕方が具体的に述べられていること。第3は、子ども、親、担任や他の教師の心理力動を理解しながら、子どもの自立を促すために各時期に応じて学校がどのように対処すればよいかが具体的に示されていることである。

このモデルを実際の不登校（学校恐怖症・登校拒否）事例に活用してみると、その時々の不登校の子どもの心理力動の理解を核にして、親と教師の心理力動相互のかかわり方が容易にアセスメントできることがわかった。親や教師にとって、先が見えないことへの不安が軽減され、子どもへの日々のかかわりかたに少しずつ変化が生じてきた。もちろん、吉村のモデルは、具体的な項目の表現が曖昧であったり、自立期が再登校を主としていたりするなど課題も多い。特に近年は、心の相談室・適応指導教室や保健室、相談室の相談機能が充実し、家庭に閉じこもっていた子どもが早期に再登校し、それらの場所を「心の居場所」とするようになってきた。しかし、居心地が良すぎて、そこから教室までの道程がとても長く、ずっとそこにいる子どものことが新たな問題として浮上し始めている。

不登校（学校恐怖症・登校拒否）の対処の出口は再登校や学級復帰にあるのではない。出口はあくまで、子どもの自立や日常生活への適応にあることは明らかである。そこで、寺田(2006)は、吉村(1988)のモデルに Blagg(1987)のアセスメントの手法を取り入れて、自立期を中心に一部修正を加えたものを活用している（表1 学校恐怖症・登校拒否の段階表）。

いずれにしても、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の段階表を活用することで、子どもや親、教師の心理力動の理解を基に、子どもの自立を促すための対処が明らかにできる。特にこの表を活用するメリットとして以下のことが挙げられる。

- ・子どもの心が今どこにあるかがわかる
- ・子どもがなぜそのように行動したり身体症

状で示したりするかがわかる

- ・子どもに直接かかわる親や教師がどのような対応をしているかがわかる
- ・親や教師の不安や葛藤、戸惑いが子どもに様々な影響を及ぼしているか気づくことができる
- ・学校として陥り易い対応と、より望ましい対処のあり方が見えてくる

日本で今日、学校教育場面で公に使用されている不登校の概念には、怠学も含まれている。子どもの欠席や遅刻・早退の様子から神経症的なものか、または怠学か、それとも、自我の未発達やいじめなど他の不登校のタイプか否かはおよそ判断できる。神経症的な子どもの多くは突然欠席し始め、そして継続する。怠学の場合は、欠席が断続し、登校した日は学級に違和感なく入ることができる。しかし次第に登校なくなり、結果的に欠席日数が増えていく。そのため、すべての事例をこの段階表で理解したり対処したりすることは危険である。それゆえ、不安や葛藤が強い不登校の子どもに限定し、活用することが大切である。

2 各段階に応じた心理力動の理解

① きっかけと子どもの心の動き

不安や葛藤を伴う不登校（学校恐怖症・登校拒否）の子どもの場合、学校や家庭の様々なできごとが引き金となることが多い（Blagg,1987）。不登校の開始のきっかけとなるできごとは、欠席が始まった時には容易に気づかれることは少ない。しかし、子ども自身や、親や教師との継続面接の中で語られることが多い。そのために、子どもの不安や葛藤は強まり、頭痛や腹痛など身体症状に訴えたり、漠然とした不安を感じたりする。もちろん、欠席日数が2～3日程度であれば、親や教師の理解や早期の適切な対処によって、子どもの不安や葛藤が軽減され、再び学校復帰や学級適応が可能となる。しかし、親や教師が子どもの不安や葛藤に気づかず、そのままになり、欠席日数だけが増え続けると、二次的要因が発生し、完全な不登校（学校恐怖症・登校拒否）となる。

表Ⅱ－１ 不登校（学校恐怖症・登校拒否）のきっかけの例 Blagg(1987)

○級友や上級生などにいじめられた	○担任や他の教師、親にしかられた
○可愛がっていたペットが死んだ	○病気でしばらく休んだ
○授業中に質問に答えられなかった	○体育や算数など苦手な科目がある
○嫌いな給食メニューが出る	○親が入院した
○親が数日家を留守にした	○祖父母が突然入院したり亡くなった

表Ⅱ－２ 二次的要因 Blagg(1987)

○学校での嫌なことを回避できる
○家で好きなように過ごせる
○親にとっても大切にされる
○暴力振るえば家庭のボスになれる
○自分のわがままがすべて通る

表Ⅱ－３ もっともらしい理由 Blagg(1987)

○先生が怖いから学校へ行きたくない
○友達がいじめるから行きたくない
○友達が無視するから行きたくない
○学校に居場所がないから行きたくない
○なんとなく行きたくない

表Ⅱ－４ しぶり期の子どもの様相 吉村 (1988)

学 校 場 面	家 庭 生 活 場 面
a. 遅刻・早退・断続欠席が増える	a. 朝、悪心、頭痛・腹痛を訴える
b. 特定教科の欠席・欠課が増える	b. 起床や身支度が遅くなる
c. 保健室に頻繁に出入りする	c. 「学校嫌、つまらい」と言う
d. 成績低下や学習意欲が減退する	d. 友達・教師批判やいじめられると言う
e. 部活動、クラブ、委員会をさぼる	e. 帰宅すると疲れがひどい
f. 友達と口をきかず孤立気味になる	f. 部屋で何もせず、閉じこもる
g. 集団活動に参加しなくなる	g. 家族と話すことをしなくなる
h. 忘れ物やぼんやりすることが増える	h. イライラして落ち着かなくなる
i. 長期休業中の課題が未提出が多くなる	i. 家族に暴言・暴力を振るう

もちろん、子どもが学校に行きたくない理由を親に訴えることも多い(表Ⅱ－２、表Ⅱ－３)。理由は、一見もっともらしく思われるもので、親を十分納得させることができる。しかし、中には級友や特定教師に対する過剰な被害者意識やマイナス感情が表現されることも多い。そのため、子どもが訴えた正当な理由を親が感情的に受け止め、学校や教育委員会に攻撃的姿勢で乗り込んだ結果、学校と家庭が対立し、子どもが益々学校に行きづらくなることもある。

② しぶり期の子どもの様相と前兆

子どもが登校をしぶり始める頃の様相は表Ⅱ－４に示される

子どもが登校をしぶり始めた時期や欠席開始時期の様子をみると、入園・入学や夏休み明けなど、学期の開始直後が多いことがわかる。

たとえば、新学期直後は、毎日、元気に登校したり学級適応したりしていたが、５月の連休明けや夏休み、冬休み明けから突然、登校をしぶったり、連続して欠席したりする。もちろん、その前兆が見られないわけではない。寝起きに頻繁に頭痛や腹痛を訴え、登校できないことを体で示すこともある。母親が起床や着替えを促しても、布団の中に居続けたり、パジャマ姿のままぼんやりしていたり、貝のように口を閉じてしまったり、頑なに体を硬くしたりすることもある。家庭で親子のこのようなやり取りが数日続いた後、完全に登校を拒否することになる。

表Ⅱ－４に示すように、学校場面でも前兆は見られる。たとえば、教室場面では、自分の持ち物をロッカーに片づけることや、教科書の用意、運動着の着替えなど身支度が遅くなる。また、ある時期から急に宿題忘れや学習への集中

力が欠けたりする。また、委員会活動や部活動への参加意欲が無くなる。さらに、級友とのささいなトラブルに感情的になったりすることもある。休み時間になると、決まって頭痛や嫌悪感を訴え、保健室に顔を出すといったことが挙げられる。

保健室通いを例に述べれば、以下ようになる。養護教諭が体温を計測しても熱が無く、励ましながら授業を受け続けさせることで、本物の不登校（学校恐怖症・登校拒否）となる子どももいる。確かに保健室通いはしばしば怠学傾向の子どものたまり場になる可能性があるた

め、区別することは難しい。結局、同じレベルで門前払いをせざるを得なくなる。そのため、不登校（学校恐怖症・登校拒否）に陥った子どもが、学校を欠席する以前に頻繁に保健室に通っていたことが後になってわかることも多い。

登校をしぶり始めた子どもは、朝、昼、夕方・夜で違った様相を示す。その変化をとらえることは、子どもの心の理解を深めたり具体的対処をしたりする上で役立つ。それでは具体的事例からその様相をみてみよう。

二つの事例に見られるように、登校をしぶり始めた子どもは、朝は親や教師にとって扱いに

事例 F 登校をしぶり始めた小学生の一日の様相

【朝】	<ul style="list-style-type: none"> ・登校時刻になると不機嫌になる。母親が車に乗せようとする抵抗する。しかし、最後には諦めて後ろ座席に乗り、学校に向かう。 ・途中、級友や同じ学校の子どもの登校する姿を見ると、あわてて車の中で身を隠す。 ・学校の駐車場や玄関先に車を止めて、力づくで母親や教師が降ろそうとするが、必死に抵抗し、降りようとしなない。仕方がなく母親は子どもを乗せて帰宅する。
【昼】	<ul style="list-style-type: none"> ・今日は登校しなくても良いとわかると、とても元気になる。 ・自分の部屋でテレビゲームをしたり漫画を読んだりして過ごす。 ・食事は自分で好きなものを作って食べることが多い。昼食後も同じ遊びを続けて、兄弟の帰宅を待つ。
【夕】 【夜】	<ul style="list-style-type: none"> ・夕食を家族と一緒に取り、会話も弾む。兄弟でTVを見たり遊んだりする。 ・明日の予定を合わせて、「明日は登校するから」と登校意欲をことばに現す。 ・深夜までテレビを見たり起きていたりする。 ・父親が仕事から帰宅すると逃げるように自分の部屋に行く。

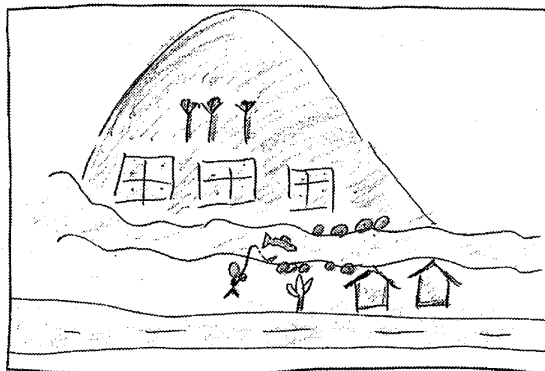
事例 G 登校をしぶり始めた小学生の一日の様相

【朝】	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校に行きたくない」と泣いて母親に訴える。 ・父親から登校や学校のことを繰り返し言われることを嫌い、父親が出勤した後決まって起きる。 ・母親と一緒に食事をしたり、後かたづけをしたりする。
【昼】	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の部屋で学校の時間帯に合わせて塾で出されたの問題集に取り組む。 ・昼、母親が用意した昼食を一人で食べて再び机に向かう。 ・電話がかかってきたり、来客があつたりしても一切出ようとしなない。 ・母親が外出を誘っても出掛けようとはしなない。 ・放課後の時間帯になり級友が訪問すると、玄関先で会って話をする。
【夕】 【夜】	<ul style="list-style-type: none"> ・夜、夕食の後は家族と一緒にテレビを見る。しかし父親との会話は避ける。 ・「明日は登校したい」と母親に話し予定を合わせる。

くい存在である。登校と言っても、子ども自身の登校意欲の発現ではなく、親や他の家族の圧力に屈し、嫌々登校する。そのため、子どもは級友に自分のみじめな姿を見られることを恐れる。一旦、登校したものの、車から降りることに対し、自分の意志で抵抗する。事例Gのように家庭で大声で激しく泣くなど、これまで見たことがない子どもの抵抗に親は困惑し、結果的に子どもの言うなりに学校から退くことになる。

子どもの家庭での昼の様相は一変する。あれほど頑なに口を閉ざしていた子どもが多弁となり、実に明るく振る舞うことに親は「こんなに元気なのになぜ登校できないのか」と疑問に思う。この時間帯の子どもは実に活動的となる。事例1のように終日、TVやゲームに熱中する子どももいれば、逆に、事例2のように学校の時間割に合わせて机に向かい必死に学習する子どもいる。このような子どもの心を理解する手だてとして、子どもの描画がとても有効である(図表Ⅱ-1, ,図表Ⅱ-2)。

図表Ⅱ-1は、事例1の子どものように家で

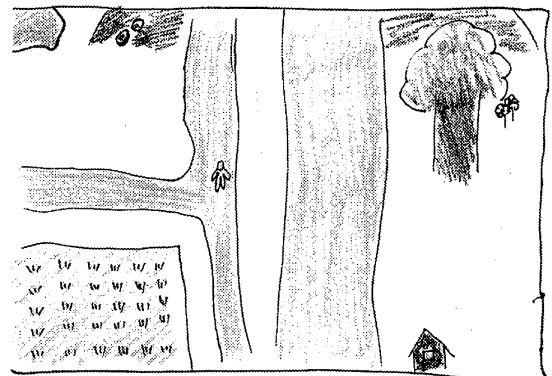


図Ⅱ-1 釣りをする子ども(寺田, 2002)

のんびり過ごす姿と結びつく。絵画に描かれた「つりをしている子ども」に示唆されるように、今、自分が置かれている状況をみごとに表現している。描画からは、一見、のんびりとした自己像が伝わってくる。また、図Ⅱ-2では、家庭や学校に自分の居場所が見つからず、ただ一人分岐した路上でたたずむ自己像が描かれている。これらの描画から、共に不登校の子ども不安や葛藤による心理力動をとらえることができる。このように登校をしぶり始めた子どもたちの一日の生活の様相は、子どもによって、また、家族の理解の深さや対応の仕方によってかなり異なることがわかる。ただ、多くの子どもは、登校時刻になると何らかの様相を示し、その時刻が過ぎればとても落ち着いた状態となる。そのため、初期のこのような子どもの心理力動を十分理解し受容した上での対処がとても大切となる。

③ 混乱期の子どもと親の様相

図表Ⅱ-5は、不安定な登校、不登校を繰り返す時期の子どもの様相を示したものである。



図Ⅱ-2 路上にたたずむ子ども(寺田, 2002)

図表Ⅱ-5 混乱期に見られる子どもの様相

登校にかかわる場面	家庭生活場面
a. 前夜に登校の準備をするが起きれない	h. 不規則な起床時刻、昼夜逆転する
b. 朝は疎み反応があるが午後は元気になる	i. 登校に自信を無くし劣等感が強まる
c. 家族や教師に心理的に攻められ苦痛を感じたり、必死に抵抗したりする	j. 周囲に理解されず不満が強まり、言動も荒くなる
d. 家族を避け、部屋に閉じこもる	k. 人目を気にしたり部屋の中を何度も動き回ったり、夜寝付かれないなど、さまざまな不安的な言動が多く見られる。
e. 教科書・カバンを隠す	l. 部屋の物を壊したり、外に捨てたりする
f. 家族との食事や会話を避ける	
g. うるさく言われ声高になり暴力を振るう	

この時期は、登校できないことの焦りや不安、葛藤がとても強まり、親の言動如何によって子どもに情緒的混乱が生じることが多い。特に顕著なものとして、家庭内では、閉じこもりや他者の排斥が見られ、孤立化が進む。このような状態像を十分理解せず、親や他の家族が一方的に再登校を促したり生活規律の建て直しを強要したりすれば、当然のことながら家庭内暴力が誘発されることになる。

混乱期を迎えた子どもの親の心はさらに混乱をきたす。多くの場合、子どもと日々直接かわる母親に大きな不安や葛藤が生じる。たとえば、突然始まった我が子の不登校（学校恐怖症・登校拒否）に狼狽し、「何を言っているの。早く準備しなさい」「今日だけは車で送ってあげるから、何としても学校に行きなさい」といった強い態度に出ることになる。しかし、家庭で登校をあれほど嫌がっていたのに、学校の駐車場に着き、車から降りたとたん、子どもが何も無かったように平然と校舎に向かうこともある。そして、一旦校舎内や教室に入ってしまうと、いつものように他の子どもたちと一緒に学習や生活をする。このような不可解な状況がしばらく続いた後、親はついに力づくで登校させることができなくなる。さらに、子育ての責任を感じたり、責められることを恐れしたりして、夫や祖父母に打ち明けることができず、母親だけで抱え込むこともある。しかし、やがて、母親自身が我が子の不登校の現実を受け入れざるを得なくなる時期が来る。

親が子どもの不登校（学校恐怖症・登校拒否）を現実的なものと受け入れるまでに多くの葛藤

が生じる。そのため、病気や体の不調を理由に欠席届けをしたり、欠席の原因を学校の出来事に帰属したりするなど、我が子の不登校（学校恐怖症・登校拒否）を強く否定したい衝動にかられる。また、親自身の不安や葛藤を打ち消すために、身体症状を訴える子どもを連れて、かかりつけの病院や診療内科を受診する。医者から起立性調節障害や心身症など心の疲労によるものと診断されたり、不登校（学校恐怖症・登校拒否）といった名前がついたりすると一安心する親は多い。子どもも病院や心療内科で投薬や心理療法による治療を受け始める。もちろん、医療機関に通院したとしても、薬や療法で風邪や腹痛のように短期間で治るわけではなく、長期化することで、親の不安はかえって増大する。

このような医療機関に通院することを拒否する子どもは多い。なぜなら、登校を拒否するために親が納得する理由を模索する子どもにとって、医療機関に行くことは自分の訴えが嘘であることを証明されてしまうことになるからである。また、自分に何が起きているかが全く理解できないこともある。そのため、多くの場合、親が医療機関や相談機関に子どもを連れ出すことはとても困難と言わざるをえない。このことが、不登校（学校恐怖症・登校拒否）による家庭での閉じこもりを助長し、家庭内暴力や昼夜逆転など様々な2次的問題を派生させることになる。さらに、今日、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の一因と見なされる発達障害や不安障害、鬱病などの精神障害の早期発見や治療も見逃されることになる（Kearney et al.,2004）。

表Ⅱ－6に示されるように、混乱期はまさに

表Ⅱ－6 混乱期の親子の様相

親 の 意 識 や 行 動	子 ども の 意 識 や 行 動
a. 不登校と判り強く動揺する	a. 登校したいが、登校できないと悩む
b. たたり条件付けで登校させる	b. 心を理解されず苦しみ、激しく抵抗する
c. 世間体を気にし、不登校を恥と思う	c. 自信を失い人目を避け部屋に閉じこもる
d. 家族間で責任転嫁し、犯人探しをする 「妻のせい」「夫のせい」「祖父母のせい」	d. 家族の争いが自分が原因と思いこみ、暴言・暴力で自己主張する
e. 子育てに自信を失い他力にすがる	e. 相談所巡りに消極的で時には拒否する
f. 学校批判し、担任に相談しようとししない	f. 原因や理由を探し、言い訳をする
g. 安易に転校を考え、その気になる	g. 転校を拒否し、転校しても不登校となる

親子で揺れ動く時期といえる。子どもの心が親の不安や葛藤を伴う言動に左右されるかがよくわかる。逆に、子どもの頑なな態度や攻撃的言動が、親の不安や葛藤を増大し、強引に登校させたり、物を買ひ与えたりするなど積極的な解決方法を選ぼうとする。そのため、子どもは一層、自分の殻に閉じこもり、暴力で訴えたりすることになる。

たとえば、完全な欠席状態に陥った子どもは、親や祖父母にしつこく登校を促されることを嫌う。特に朝、決まってるさく言葉をかける親や祖父母がいる場合、子どもはそれを避けようと、布団の中に潜り込み、親が布団をはがそうとしても、激しく抵抗する。また、毎日のように「今日は学校に行くの、行かないの」「日中や夕方はこんなに元気なら明日は行けるわね」「今日も友達が迎えに来てくれたよ」といった言葉をかける。そのため家族との会話を避けて自分の部屋に閉じこもり、夜遅くまで起きていて、昼近くまで寝るなど昼夜逆転の生活をしたり、自分の部屋で食事をしたりする。

しかし、親が子どもが不登校（学校恐怖症・登校拒否）であることの現実を受け入れられるようになると、親の子どもに対する態度も様変わりし始める。「今は、そっとして置くことが一番」と、あれほど頻繁に行っていた子どもへの関与を一切放棄することで、子どもが登校し始めるのを待とうとする。しかし、親の期待や努力は結果的に裏切られ、かえって子どもへの不信感が増し、親自身、敗北感を味わうことになる。

さらに、夫婦間や祖父母の関係も気まづくなる。たとえば、すべて母親の躰のせいとされたり、妻の夫への不信感や憎悪の気持ちすら生まれてくる。かくして、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の子どもと親や他の家族との間で長く苦しい心の旅が始まる。

混乱期が終息し始める頃になると、子どもは本当に学校に行かなくなる。すると、親は焦り始め、「このままだと学校から見放されてしまうから、我が子を何とか登校させたい」といった思いや、「あれほど楽しく登校していたのになぜ行けないのか」といった疑問にかられる。

そこで、親だけが、もしくは、子どもも連れて病院や相談所、時には、民間の様々な相談所に通い始める。さらに、不登校（学校恐怖症・登校拒否）や子育ての講演会の催しに足しげく通い、救いを求めようとする親も多い。一方、子どもはあれこれ診断や面接を受ける。しかし、表面的には応じていても、次第に疲れ、苛立ち、「もうあそこには行かない」と拒否し始める。親の方も何度も子どもの症状や生育暦をたずねられたり、あげくの果てに養育態度を否定されたり批判されたりすることに嫌気が差し、次第に無気力状態となる。

④ 模索期の子どもと親の様相

模索期は、子どもも親も安定した時期と言える。子どもにとって家庭が居場所となり、学校にかかわる話題以外なら、ごく普通の会話が親子の間でできるようになる。もちろん、子どもは学校のことや級友のことをけて忘れていないわけではない。むしろ、家庭にいて、学校のことや級友のことがとても気になるのも事実である。「授業が分からなくなってしまう」「級友から置いていかれてしまう」「高校に進学できない」といった焦りや不安はとても強まる。しかし、今はこうするしか方法がないと半ば諦めているのが大半の子どもたちである。

子どもが毎日落ち着いて生活していることで、親も心が休まる。あれほど頑なに拒否していた家族との会話や食事をし始めた姿に、繊細なまでに気を遣いながらも安堵の気持ちになる。しかし、現実には我が子は、家庭に閉じこもり、この状態がいつまで続くのか、進学できるのか、このままずっと家庭に閉じこもるのではないかといった不安が頭を過ぎる。言っではいけないと思いつつ、ふと口に出たことばが、子どもの心を刺激し、再び混乱期の悪夢が蘇る。さらに、祖父母と同居の場合は、親と祖父母との間にも様々な葛藤や亀裂が生じ、このことが家族関係を不安定にさせる。

家庭に閉じこもっている子どもの一日の生活といえば、部屋でTVのチャンネルを次々と換えて見たり、ゲームをしたり、同じマンガの本を何度も読んだり、自分の好きなことをした

りして一日を過ごすのが一般的である。もちろん、学校のことを忘れていないわけではない。親や祖父母が学校のことを話題にすれば表情が一変し、暴言を吐き、荒々しげに扉をしめて出ていく子どももいる。

子どもの中には、学校の時間割に合わせて教科書や問題集を取り出し、必死に机に向かうこともある。もちろん、学習効率が上がるわけではない。ただそうすることで学校や級友から置いておかれることへの不安や焦りを和らげようとするのである。心の中は、「学校に行かなければ、みんなからどんどん置いて置かれてしまう」という気持ちと、「今更、学校なんか行けない。でもみんながどう思うか心配」という不安や葛藤が生じ、強迫的なまでに机に向かおうとするのである。

さらに、平日の登校時刻になると、何度もト

イレに入ったり、家族と視線を合わせることを避けたりするなど、何か落ち着かず、物や家族に当たり散らす子どももいる。始業時刻が過ぎると、表情も穏やかになり、平常心を取り戻し、テレビを見たり好きな音楽に一日中耳を傾けたりする。しかし、何か空虚な気持ちになることが多く、学校へ行っていないことに自信を無くし、外出も億劫となる。級友が学校へ行っているのに自分だけ家にいることに劣等感を抱く子どもは多い。そのため人目がとても気になり、部屋のカーテンや雨戸を締め切ってしまうこともある。

このように完全に自宅に閉じこもった状態が続くと、親も不安になり、話題を選び話そうとする。そのために親子関係がますます気まずくなることもしばしばある。

表Ⅱ－７ 模索期に見られる親子の様相

登校にかかわる子どもの意識や行動	親の意識や行動
a. TVやゲーム、漫画や音楽に没頭する	a. 気にはなるが登校を強要しなくなる
b. 一見、落ち着いた様子で一日過ごす	b. 好きなことをさせる以外手はないと思う
c. 家族との接触や会話が增える	c. 手伝いや部屋の模様替えなどをさせる
d. 勉強や学校のことが話題になると無口になったり、暴力を振るったりする	d. 将来の不安から勉強や進路変更を勧めたり、再登校を促したりする
e. 担任や級友の訪問、電話に出ることを回避したり受け入れたりする	e. 訪問者への対応をさせたり子どもの意志や自発性に任せたりする
f. 将来への不安や焦りは強い	f. 生活規律の乱れはとても気になるが、しかし、どうすることもできないと諦め、当面は今の行動を理解し見守ろうとする
g. 日常生活は混乱し、洗面・歯磨きもしない、風呂も入らない	g. 担任に見放されたという不安を持つ□
h. 外出を嫌い、理容にも行かない	h. 長期欠席となり学校に相談に行き行きづらくなる□
i. 学年末、学期末、始業期に不安が高まる	

事例Ⅱ 模索期の中学生の一日の様相

【朝】	<ul style="list-style-type: none"> ・他の家族と一緒に起きて朝食をする。 ・家族が出掛けた後はテレビを見たり手伝いをしたりする。
【昼】	<ul style="list-style-type: none"> ・昼食を母親の分まで作り母親の帰りを待ち、一緒に食べる。 ・食後の後、母親が誘えば学校がある地元地域から離れたスーパーや本屋などに一緒に出掛け、買い物をする。
【夕】	<ul style="list-style-type: none"> ・夕食の手伝いをしたり兄弟と一緒に遊ぶことが多い。
【夜】	<ul style="list-style-type: none"> ・早めに風呂に入り自分の部屋で寝る。

事例Ⅰ 模索期の中学生の一日の様相

【朝】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全然起きず昼まで寝ていることが多い。 ・ 着替えもせず、パジャマのままいることが多い。
【昼】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 午後2時過ぎに起きて食事をする。 ・ 再び自分の部屋に閉じこもり、TVやゲームなどをして過ごす。
【夕】 【夜】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 父親の勤めが遅くほとんど会話をしたことはない。 ・ 専ら兄弟と母親との会話となる。 ・ 深夜遅くまで自分の部屋でラジオ番組を聴いているため眠るのが午前2～3時過ぎる。

表Ⅱ－8 回復期に見られる親子の様相

登校にかかわる子どもの意識や行動	親 の 意 識 や 行 動
a. 次第に周囲に目を向け活動を始める (外出・趣味・学習・アルバイトなど) b. 起床時刻が早くなり、家事手伝いや体力作りを始める c. 新聞、TVニュースに関心を持ち、家族と話題にする d. 一人で買い物や床屋に出かける e. 家族や担任、級友に自分の気持ちを話せるようになる f. 相手の気持ちを理解したり、話を素直に聞いたりできるようになる	a. 子どもなりに成長していると受け止め、自発性を伸ばす機会を増やす b. 子どもの動きに任せようとする c. 子どもを強く押し出す力を持つ d. 意欲が出れば学習は大丈夫と考える e. 学校を信頼し連絡や相談を積極的にする

事例Ⅱ (中学2年生不登校) の概要 その1
初回面接 (受理)

- ・ 母親のみ来所、主訴は子どもの不登校
- ・ 不登校のきっかけについて：学校がある日の午前中に病院に行くこととなり、そのことを級友に話した。予定より早く治療が終わったため再び登校した。その時の級友の一言が本人にはとても気になった。
- ・ 子どもの様相：5月の連休明けから不登校となる。学校には頭痛を訴えるため、親が病気による欠席届をした。人目を気にして平日は家の外には一切出ようとしない。
- ・ 来所動機：早期再登校を願い、学校に対しネガティブな感情が強く内緒で来談した。
- ・ 母子の心理力動：子どもは、家族との会話を避け、食事も別にしている。母親に強く甘えてくる。母親は、子ども言動に絶えず揺れ動き、再登校への焦りと子どもの家庭での閉じこもりに強い不安や葛藤を示す。

⑤ 回復期の子どもと親の様相

回復期は、とてもエネルギーに子どもが活動する時期である。子どもは学習以外のことに夢中になって取り組み始める。たとえば、TVや新聞のニュースに関心を持ち、家族と話題にする。昼夜逆転の生活から一転し次第に起床時刻が早くなり、家族と一緒に食事や手伝いなども始める。あれほどまで不安な態度を示していたのに、平日に自転車で近くの店や床屋に出かける。また、親子の間に会話もはずみ、以前のように自分の思いや気持ちを語ることができる。

このような子どもの変化に親は驚きと同時に、再登校に向けた強い期待を抱き始める。しかし、かつての混乱期のような焦りの気持ちは薄らぎ、子どもの自発性や意志を先ず尊重し、今の行動を見守ろうとする。そして、これまでの行き先のわからない長い暗闇の中で見つけた一瞬の閃光に親の心は癒され、不安や葛藤は少

なくなり、子どもに対する信頼感や親としての自信すら回復する。

もちろん、模索期から回復期への移行は事例によって様々である。いとも簡単に移行するものもあれば、数ヶ月～数年間を要する場合がある。ただ、言えることは、何かが子どもの心に起きることである。それが、家庭内のできごとであったり、環境の変化や子ども自身の気づきであったりすることもある。いずれにしても、子どもの内と外で、変化が生じ、それが子どもの意識や意欲を高め、行動し始めることになる。

事例 J（中学 2 年生不登校）の概要 その 2 第 2 回面接

- ・子どもの家庭での閉じこもりを心配した祖父母が子どものことで母親に口を出すことに母親は内心不快に思い、葛藤していた。しかし、父親の「自分たちの子どものことなので今は見守っていて欲しい」ということばで家族内の緊張がほぐれた。
- ・子どもが犬を飼うことに興味を示し始めた。飼うべきかどうかた伺いたい。
- ◎助言：犬を飼うことがそのまま早期の再登校に結びつくとは言えない。しかし、いくつかの事例に見られるように、これまでともすれば家族内の話題が子どもの不登校問題に集中する傾向が強かったのが、犬に向けられることで、子どもも会話に加わることができるかもしれない。また、犬の選定を子どもに任せたり、犬小屋を父親と手作りすることで、父子のよい関係を築くことができるかもしれない。

第 3 回～4 回面接

- ・犬が登場したことで、家族の会話の話題が広がった。
- ・夕方、家族が交替しながら子どもと一緒に犬の散歩に出かけるようになった。
- ・最初は家から出ることに抵抗したが、次第に自分の意志で散歩するようになった。
- ・ある日の夕方、犬を連れて中学の校庭に入ることができた。その姿に気づかれた生徒指導主事と子どもが会話をした。
- ・週末（土日）には友達と会うようになった。

事例 J では、犬を飼うことで子どもが学校に向けて動き始めたことに母親と祖母の気持ちが安定し始めた。さらに、母親がこれまで抱いていた教師に対するネガティブな感情が薄れ、次第に生徒指導主事への信頼感情が増してきた。

犬の登場で、家族内の心理力動に大きな変化が生じていることがわかる。さらに、家族全員が協力し閉じこもり状態であった子どもを外に一步踏み出させ、結果的には学校に夕方登校するといった新しい展開が見られることになったのである。

教師側にも大きな変化が見られる。たとえば、2ヶ月間、家庭に閉じこもり状態にあった J に学校としてどのように対応すればよいか戸惑っていた。しかし、ある日の夕方、突然、家族の随伴で犬を連れて校庭に現れた姿を見て、とっさに生徒指導主事が外に飛び出し J に声をかけた。このことが、その後の J の行動を大きく変えることになる。学校の生徒指導主事が、親の了承の下、再登校に向けて学校としての対応について、7月末に筆者の基に来談した。ここでは、守秘義務を守りながら、これまでの学校の対応について何うとともに、夏季休業中の対応を含めた今後の対処のあり方を検討した。

⑥ 自立期の子どもと親、教師

しぶり期、混乱期、模索期、そして、回復期を経て子どもは、再登校や学級適応、進級や進学、就職といった様々な自己決定をする時期を迎える。子ども自身の意志と意欲が発現され現実場面に直面しながら自立しようとする動きがみられることから自立期と呼ぶことができる。もちろん、この時期には、さらに様々な障害が全面に立ちはだかる。それに直面した時、子どもはこれまで以上に不安や恐怖心を増したり葛藤したりする。そして、余りにも意欲だけが空回りしたり、不安や恐怖心、葛藤が強まったりすると、その場から家庭に一時的に避難することもある。このような一時的逃避から再び現実に向かいようとし、かえって疲労困憊し、再びしぶり期や混乱期へと後戻りする事例は多い。

それだけに、教師、スクールカウンセラー・相談員、そして、他の医療・相談機関のスタッ

フが自立期の子どもや親の心理力動をどのように理解し、対処するかが、その後の子どもの自立を大きく左右する。

自立期は子どもや親、そして、教師にとって心理的に負担の大きな時期といえる。子どもにとっては、再登校したとしても、これまでとは違う全く新しいイメージの校舎や級友のように映る。心を開いてどこまで自分開示すればよいかという戸惑いや、長期に渡り欠席したことに級友はどう思っているのか、もし、そのことについて何かたずねられたらどうしようかといったことに神経を張り巡らすことになる。さらに、学習の遅れや定期テストも不安の原因になる。そのため、池田(1995)が示唆するように、再登校をして、教師等学校職員とのかかわり（タテ関係）は容易にできて、同世代の子どもとのかかわり（ヨコ関係）に抵抗感が強まることが多い。

子どもは、この時期には保健室や相談室を居場所に登校をしたり、時には地域の適応指導教室に通い始めたりする。しかし、多くの子どもは、自分の所属する教室に入ることに強い不安や恐怖心を持つ。そのため、周囲のはたらきかけで一旦は教室に入ったとしても、すぐに元の居場所に戻ることになる。その補償として、保健室や相談室、適応指導教室では養護教諭や相談人、他の仲間に対して伸び伸びと自己を表現したり活動をしたりする。しかし、日本では、近年、不登校への理解や対処が教師の間に浸透してきたと言っても、このような心の居場所の存在そのものを否定したり疑問視したりする風潮は根強い。

その大きな理由は、「学校に来ているのになぜ学級に居ることができないのか。それは校内に子どもを甘やかしたり過保護にしたりする場所があるからだ」というものである。文部科学

表Ⅱ－９ 自立期その１（再登校時期）に見られる子どもの様相

学校場面の子どもの意識や行動	家庭場面の子どもの意識や行動
a. 再登校し、一見明るく振る舞うが、とても緊張し、周囲を気にする b. 子ども用の玄関から入ったり教室に直接入れない c. 相談室や保健室なら抵抗なく入る d. 少数の級友ならかかわることができる e. 登校した日は今日してで落ち着かない f. 相談室や保健室から積極的に外に出る g. 相談室や保健室で給食を食べる	【家庭場面】 h. 親に言われ登校準備をする i. 登校した日は家で多弁となる j. 登校翌日は疲れがひどく欠席する k. 疲れて早く寝るが朝起きられない l. 「明日も行くよ」と宣言する m. 放課後や休日は積極的に外出する

表Ⅱ－１０ 自立期その２（学級適応期・自己実現期）に見られる子どもの様相

学校場面の子どもの意識や行動	家庭場面の子どもの意識や行動
a. 朝の集団登校や友達との登校を行う□ b. 児童生徒用の玄関から教室に向かう□ c. 緊張せず朝の活動に参加する□ d. 授業に出て、積極的に学習する□ e. 係り活動やクラブ活動に参加する□ f. 休み時間に級友と会話したり遊ぶ□ g. 給食を学級で食べる□ h. 掃除を級友と一緒に取り組む□ i. 自分の考えや気持ちを級友や担任に話す□ j. 終日、充実感を持ち学校生活をする□	k. 進んで登校の準備をする□ l. 着替えや朝食をすばやくする□ m. 家族との自然な会話が増える□ n. 手伝いや遊びを進んでする□ o. 宿題や自主的学習をする□ p. 生活リズムが安定し体調も良い□ q. 自分の感情を家族に伝えられる□ r. 土日以外に友達と外出や活動をする□ s. 進路や生き方に自覚や自信を持つ□ t. 家族との信頼感や一体感が増す□

省の不登校の調査結果（2006）からもそのことを危惧する見方が指摘されている。

そこで、自立期をさらに二つに分けて、子どもや親の心理力動を理解しつつ、積極的な対処を試みる必要性が生まれてくる（表Ⅱ その1、その2参照）。

第1は、家庭に長期に渡り閉じこもっていた子どもが、再登校や学級復帰を試みる時期、第2は、保健室、相談室、適応始動教室といった心の居場所から学級への適応ができる時期に分けて、それぞれの心理的力動や対処を検討するものである。

事例Jの場合、学校での居場所は、主に夕方登校による体育館での友達や一部教師とのバスケットゲームの場である。しかし、学校のキーパーソンとしての役割を演じた生徒指導主事や担任の積極的はたらきかけで、夕方ではあるが、教室の前まで行くことができた。さらに、学校と家庭との当日に向けた事前のきめ細かな連携や配慮によって、3日間の修学旅行に級友と共に参加できたことで、自立期の最終段階である学級適応が可能となっていたのである。

もちろん、子ども自身の心や行動の大きな変容は、母親にも大きな影響を及ぼし始めたことが第13回目の面接からわかる。それは、母親が語った「これまで余りにも子どもが私に甘えていたと思っていたが、私自身が子どもにベッタリし過ぎていたことに気づきました」ということばである。この事例は、不登校（学校恐怖症・登校拒否）という形で、まさに、母子それぞれの分離と自立というテーマが潜んでいたことを示唆している。

さらにまた、Jの不登校（学校恐怖症・登校拒否）という行動を通して、家族全体の心理力動が大きく変容してきたこともわかる。母親と祖父母の嫁、姑の関係、父子関係、さらに、Jを取り巻く家族全員の関係が緊張や不安を次第に軽減し、Jに直接及び間接的にかかわろうとする動きが生まれてきた。このような家族の心理力動が再登校や学級適応に向けた子ども自身の意欲の発現を促す役割を果たすことにつながったものと考えられる。

事例J（中学2年生不登校）面接の概要 その3 第6～12回

- ・犬を連れて夕方登校し、職員室でパソコンを習う
- ・最初は中学校の体育大会への参加を拒否。当日は午前中は母親が随伴し、午後は一人で出かける
- ・友達と学校の体育館で夕方バスケットを始め、毎日行く
- ・教師も一緒にバスケットをする
- ・家族で一緒に食事をするようになる
- ・冬休みに父親と犬小屋を冬支度をする
- ・冬休みの課題の書き初めを書き、提出する
- ・夕方、生徒指導主事と教室の前まで書き初めの展示を見に行く

第13回面接

- ・地域の子ども会行事に葛藤しながらも参加
- ・母親が自ら密着し過ぎた母子関係に気づく
- ・子どもの自己決定を優先する考えかたの大切さを語る

第14～16回

- ・学年が変わり中学3年生となる。
- ・4月から毎日夕方登校し、進路や修学旅行について担任と話すようになる
- ・5月、本人の修学旅行の参加意欲が高まり、仲間とのかかわりが増える
- ・修学旅行当日は、自分の意志で一人で家から出かける
- ・これを契機に、学級復帰し、以前のように学習、生活の両面で適応する

第17回面接（終結）

- ・子どもが自立したことを理由に母親から相談の終結を申し出る

3 親の心理力動の理解

不登校（学校恐怖症・登校拒否）の相談事例では、家族の中で最も頻繁に子どもとかかわる母親との相談が主となる。個別の面接や親の会などの集団面接の場で語られる母親のことばや仕草の中に、親子の心理力動だけでなく、家族内や学校及び教師に対する心理力動を伺うことができる。寺田（2001）は、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の具体的事例に基づき、しづり期か

ら自立期までに見られる親の心理力動の様相を以下のようにとらえた

- しぶり期～混乱期
 - ・相談の呼びかけや親の会の誘いに抵抗や不安が強い
 - ・面接場面でこれまで抑えられてきた感情を一度に表出し、浄化される
- 模索期～回復期
 - ・担任や学校側からの対応に不信感や不満が強い
 - ・親の会では、我が子へのかかわり方を基に他の親に助言することがある
 - ・日々、変容する子どもの様相が語られることが多い
- 自立期
 - ・親子関係の振り返りが行われることが多い
 - ・母親自身への気づきが見られる
- 子育ての振り返り

特に回復期以降になると、冷静に自己を見つめることができるようになり、単に子どもがなぜ登校できないのかといったことや、担任や学校のかかわり方に責任転嫁することよりも、母親自身の生き方や子育ての振り返りが始まることが多い。

- ・幼少時から手のかからない子だった
- ・幼少時から自分の気持ちが伝えることができなかった
- ・「やりきる子」「がんばる子」と期待し過ぎてきた
- ・子どものことを何でも親が先取りしてやっ
てしまっていた
- ・親の都合で子どもとかかわることが多く、
子どもの意思を言い込めてしまっていた
- ・祖父母など周囲から気をつけて育てるよう
に言われ、厳しく育てた
- ・せっかちで、子どもの自由を奪ってきた
- ・個性を無視し、親のペースで押さえ込んで
きた
- ・学校に登校できないこと以外は何も問題が
無く、腹が立つ
- ・子どもの荒れる姿は、まさに親自身の姿だ
と思う
- ・親自身も「心配して欲しい」「放っておい

て欲しい」という2つの気持ちがある

- ・子どもは親の表情をよく見ている
- ・自分を亡くし、親や級友にも過剰適応して
いたのだと思う
- ・今は、子どもに自分を考える時間を与える
ことの大切さがわかる

○家族の心理的力動の変容の気づき

子どもと毎日直接向かい合う母親は、夫や祖父母から誕生から今日までの子育ての仕方を責められることが多い。それだけに、夫や祖父母に強い怒りや敵意を抱いても、家庭の中では直接それを口にできないつらさがある。このような母親の怒りや敵意を吐露する機会となるのが個別の面接場面や集団面接の場面である。特に集団面接場面では同じような立場の他の母親の語ることばに触発され、これまで意識的にも無意識的にも抑え込んできた怒りや敵意の感情が表出することが多い。以下はその一例であるが、母親が自分の感情や気持ちを吐露することで次第に家族全体の心理力動の変容に気づくことができる。

- ・夫の身勝手さに腹が立つ
- ・祖母の「あんたがしっかりしていなから孫
がこうなった」の一言が腹が立つ
- ・私自身やる気がなくなり、葛藤していた
が、夫もつらかったと思う
- ・時間が経つにつれて夫婦でいろいろ話をす
るようになった
- ・夫が祖母に「これは私たちの子どものこと
だから」とはっきり言ってもらえた
- ・夫も相談を受け、子どもとかかわれるよう
になってきた
- ・夫にもっと子どもとかかわって欲しいと
思っていたが、今になると、夫の得意な所
で子どもにかかわってもらえてよかったと
思う
- ・夫の存在は大きく、子どものことを冷静に
見守ることができる
- ・家族がばらばらで、食事も子どもは自分だ
けで食べていた
- ・親子関係が穏やかになり、今は一緒に食事
ができるようになった
- 子どもの不登校の意味への気づき

子どもが突然始めた不登校（学校恐怖症・登校拒否）を、当初は学校の問題と頭ごなしに決めつける親の心理や態度は当然のことである。確かに学級担任の対応や級友の言動が子どもの登校意欲を低減したり不安や恐怖心を増したりして、登校を拒否することはある。しかし、欠席が長引くにつれて、親は子どもと一緒に過ごすことでこれまでとは違った子どもの意外な面や成長の様子が見えてくる。そのことが親自身の不登校（学校恐怖症・登校拒否）に対する見方を大きく変えることになる。

- ・子どもの不登校（学校恐怖症・登校拒否）の現実を今はそのまま受け入れ、肯定的にみることができる
- ・学校との関係を持ち続けることは、親も実はとてもつらかった。
- ・学校との関係を切ったら、親も子どももとても楽になった

以上、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の前兆から始まり、登校をしぶる時期（しぶり期）、登校を巡り子どもはもちろんのこと親も教師も不安定となる時期（混乱期）、そして、家庭に閉じ困ったり、生活そのものが怠惰になる時期（模索期）を経て、少しずつ活動をし始めたり家族とのよい関係が蘇る時期（回復期）、再登校や学級適応など子どもにとってこれまで拒否したり強い不安や葛藤を抱いていた現実と直面する時期（自立期）における子ども、親、教師の心理力動を子どもの心の動きを中心に見てきた。

このように、不登校を5つの時期に分けて子どもの心理力動の様相をとらえることで、子どもが大きく成長していくことがわかる。子どもの成長は、当然のことながら親や家族の心の安定や成長を促すことになることもわかる。そして、両者の心理力動が相互に影響を及ぼし、子どもを取り巻く家族全体の心理力動を大きく変容させていくことになる。

不登校（学校恐怖症・登校拒否）の原因を、教師は子どもの性格や家族の問題に帰属しがちである。もちろん、これまで述べてきた調査や研究の中では、それらの要因が一因となることを支持するものは多い。しかし、一方で、親と

教師とのよい関係が生まれると、親の側に、親子のかかわりや子育てを振り返り、子どもの意思や意欲を無意識的に抑え込んでいたことに気づき、不登校（学校恐怖症・登校拒否）を子ども自身の自立の問題であることを洞察し始める動きが見られ。

それゆえ、学校側として大切なことは、しぶり期～自立期までの各段階ごとの子どもや親に対する担任や他の教師の対応の仕方そのものに謙虚に目を向ける姿勢である。親の担任や学校に対するネガティブな感情や態度が、どのような心理力動を背景にしているかを理解することは、日々の親や子どもに対する学校側のかかわり方を謙虚に見直す契機となる。このことの大切さを示唆するのは次の母親の一言である。

「子どもが不登校（学校恐怖症・登校拒否）になり、最初はとても混乱した。でも、先生方のお陰でうろたえることもなく、この機会に私たちは親自身の子育てを見直すことができた。ある面でこれでよかったと思う」（寺田，2001）

Ⅲ 学校の心理力動

不登校（学校恐怖症・登校拒否）の臨床事例に関する調査や研究では、子どもや親、そして、家族の心理力動を解明することは多い。このような心理力動的接近によって、子どもがどのような状況で不登校（学校恐怖症・登校拒否）が始まったかや、親子の心の動きを理解することが可能となる。しかし、家族内の心理力動のみに着目して対処したとしても、親子の不安や葛藤の説明に留まることになるといえる。なぜなら、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の子どもにとっての現実とは、家庭や家族ではなく、あくまで学校場面であるからである。すなわち、子どもにとって現実の学校がどのように映っているかということをとらえることはそれなりに意義がある。さらに学校内で生じる教師相互や親と担任・他の教師との心理力動に着目することは、ともすれば機能不全型の学校の相談態勢を有効に機能させ、子どもへ効果的な対処や親と学校との信頼関係の回復を促し、結果的に、再

登校や子どもの自立を促すための対処を助長することになると考える。

ここでは、特に不登校（学校恐怖症・登校拒否）の事例に直接かかわる担任や生徒指導主事や養護教諭、管理職の心理力動に着目し、その現状と対処の方策について考察する。

1 学級担任の心理力動の解明

① 担任の心の動きと対応

学級の子どもが登校をしぶり始めたり完全な欠席状態になったりしたとき、担任にどのような心の動きや行動が見られるだろうか。たとえば、担任は、職員室の前後の本日の欠席児童数の黒板がとても気になり始める。「本日の欠席・遅刻・早退調べ」に学級の子どもの名前が載り、やがて、消されることもなく毎日残され、周囲の教師の目にも留まるようになる。すると、「これは大変だ。何とかしなければ」と、休み始めた子どもの家庭に電話をかけたり、予告せずに家庭訪問をしたりする。しかし、その努力が実ることは少ない。さらに、毎日の朝の会に出かけ、教室にできた1つの空席をみるたびに、「ああ、今日も欠席か。いつまで続くのだろう」「どうしたら登校してくれるのか」といった諦めに近い気持ちになる。

同僚や学年主任、教育相談係や管理職から、「今日もクラスのあの子が休んでいるね」と言われるたびに、平常心を装い、「はい。私も実はとても気になっているので、今日は放課後に家庭訪問をしようと思っています」といった応答をする。また、登校させたいという焦りの気持ちだけが先走り、頻繁に訪問を繰り返すと、子どもの方から会うことを拒否し始める。担任は、仕方が無く、母親と玄関先でわずかな時間、話をするだけで帰ることになる。そのため、担任も家庭訪問に次第に気持ちが重くなり、「こんなに何回も訪問しているのに。どうして会おうとしないのか」といった不満さえ増す。そして、意識的に子どもが欠席していることを忘れるように努めたり、週1回の形式的な訪問に徹するなど、割り切った対応をすることになる。

このような担任とは逆に、「不登校の子どもに対しては絶対に登校刺激を与えてはいけな

い」と言われている。だから今はそっとしておくのが一番」と、最初から一見物分かりのよい担任もいる。確かに子どもが登校をしぶる段階では、担任による積極的なかわり方で、家庭訪問の後、子どもが決まって不安定となったり、暴言や暴力を振るうなどして、親子の混乱が一層エスカレートすることも多い。さらに、そのような担任の積極的な態度に、親子が共に反感や敵意さえ抱くこともある。

かといって、担任からの電話や家庭訪問の回数が少なくなれば、子どもや親にしてみれば、「担任の先生は顔も見せてもらえない」と、学校から見放されたという不安な気持ちが強まり、かえって担任不信に陥ることになる。

さらに、担任と子どもや親との気持ちの行き違いが生じたまま、欠席が長引けば、担任への不安や不信感が障害となり、子ども自身が再登校に向けて動き始めたり、自立しようとしたりする時期を逸し、自立の機会を逃すことになる。それだけに、担任としては、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の心理力動の一般的理解と併せて、現実の目の前の子どもや親との良い関係づくりを前提とした、適切な対処が望まれる。

2 心理力動に基づく理解と対処

① 学校の実情

小中学校における不登校の増加は、担任を中心とした学校の相談態勢にとって深刻な問題の一つとなっている。不登校を出さない学級・学校づくりを目指し、不登校の子どもへの学校一丸となって取り組もうとする動きの重要性はわかっているが、現実にはそうはいかない。その障壁となっているものは、立川(2006)が指摘するように教師自身の不登校に対する意識や認識の問題がある。たとえば、不登校の子どもが示すさまざまな言動から、怠け、わがまま、無気力といった子どもの性格上の問題に帰属しようとする姿勢はいまだに根強い。さらに、過保護、溺愛、放任といった親の養育態度や、不和、離婚といった家庭の問題を強調する考え方もみられる。教師のこのような不登校に対する意識や認識のあり方が、実際の不登校の子どもや親にかかわるとき、様々な様相となって現れるこ

とになる。

模索期や回復期においては、益々、担任や学校からのほたらきかけが消極的となりやすい。そのことは、子どもや親にとって一時的にはほっとさせらるが、学校から見放されたという不安を増すことになる。さらに、子どもが再登校をし始める自立期になると、担任や他の教師はどのようにかわればよいかわからず、腫れ物にさわるような対応をし、子ども本人や学級の他の子どもたちから反感をかうことも多い。そのため特別扱いされることに嫌悪感や孤立感を強め、再び子どもが家庭に閉じこもることにもなる。

なぜこのようなことが生じるのか、このことについて、吉村（1988）は上述した不登校（学校恐怖症・登校拒否）のモデルの中で具体的に示している（資料1参照）。たとえば、しぶり期の担任や他の教師が陥りがちなこととして、前兆に気づかず、親の届出をそのまま受け止めたり、保健室や職員室に頻繁にくる子どもを怠けや仲間からのエスケープととらえたりする。さらに、登校をしぶり始めた子どもや楽しい行事だけに登校する子どもを冷ややかに迎え入れる。授業場面でみると、私語をしたり他ごとをする子どもがいると全体の場で大声をあげたて注意したり、叱ったりすることも、登校をしぶり始めた子どもにとって強い不安を抱かせることになる。混乱期の対応としてかつては、大声を上げたり泣きわめく子どもを無理矢理登校させるよう親に強く求めたり、担任や生徒指導主事などが自ら家庭に乗り込み、強引に学校に連れてくるといったことが多かった。しかし、その対応が心理臨床家より真っ向から否定され始めると、子どもや親に何もはたらきかけをしないで見守ったり、親のせいにしたり、打つ手がないことに悲観し、担任一人が悩み続けるといったことも多い。

仮に全教職員が不登校（学校恐怖症・登校拒否）の子どもや親へのかかわりかたや学校としての基本的対処のありかたを共通理解する場を設けることができれば、目の前の事例に戸惑うことも少なくなり、余裕を持って対処することができる。そのため、全教職員が共通理解を図る

場として段階に応じた理解と対処モデルを活用することが有効と思われる。このモデルには、子どもの心理力動に基づく言動だけでなく、教職員や親の心理力動が子どもの成長段階と対応した形で記載されている。さらに、学校として具体的に何をすることが今できるかが示唆されている。

このモデルを活用することで、今、子どもや親、そして学校がどのような状態にあるかのアセスメントが可能となる。ともすれば、教師は子どもや親の言動に目を向けがちなことが多い。そのため、子どもや親に直接的または間接的にかかわる教師や学校の相談態勢そのものに着目することで、これまで以上に子どもや親の心理的力動に基づく言動の理解を深めたり、担任を積極的に支援する相談態勢づくりをしたりすることにつながる。

② しぶり期の理解と対処

子どもが学校を休み始める兆しは先ずは身体症状で診られることが多い。家庭では、朝、頭痛、腹痛、嫌悪感など体の具合の悪いことを訴え始める。親は、子どもが訴えることをそのまま受け止め、早々に医者に連れて行く。多くの子どもは、1～2日欠席した後、再びいつものように元気よく登校する。しかし、中には、病気の訴えは消えても、起床時刻が遅くなったり、親が声を荒げて身支度をしたりする子どもがいる。

学校場面でも不登校（学校恐怖症・登校拒否）の兆しと思われる子どもの言動が見られる。「そういえば、連休明けから遅刻や早退が多かったように思う」とか、「苦手な特定教科の日には決まって休んでいた」と言うように、前兆に後になって担任が気づくこともある。また、養護教諭の場合、「休み始める前によく保健室に来ていた」とか、「頭が痛いと言うので、熱を測ったが、それほど熱は無かった」と言うように、頻繁に子どもたちが保健室通いをしていたことを指摘する。ただ、保健室に来る子どもたちのすべてが不登校（学校恐怖症・登校拒否）となるわけではなく、本当の病気の前兆の場合もある。

保健室で見られる不登校（学校恐怖症・登校

拒否)の兆しは一部であり、学校の様々な場面において兆しが診られることを理解しておくことが大切である。

親は、子どもの様子がおかしいことに気づき、理由をたずねても、原因がはっきりせず、「別に何も無い。放っておいて」と開き直す子どももいる。理由を執拗に尋ねられると、「先生が嫌い」「友だちがいじめるから学校へ行きたくない」と訴えるしか術がないこともある。親は、子どもが重い口を開き、話した理由を鵜呑みにして、感情的となり、学校に電話や直接で抗議をすることもある。

担任にしてみれば親から指摘された理由について冷静に考えたり、事実の確認をしたりしても、全く思い当たらないことが多い。しかも、親に説明すればするほど、親の方が担任や学校に対して不信となり、学校への相談の足が遠のくことになる。

上に述べたように、登校を巡って親子の間に生じる様々やり取りや、身体症状を伴う時期を、「しぶり期」と呼び、周囲からの登校催促や学校復帰に対する圧力に対して示すさまざまな情緒的反応を梅垣は「疎み反応」と名付けている。疎み反応には身体的反応や情緒的反応があり、不登校の子どもに共通した言動がみられることになる。

登校を巡って子どもや親、そして、担任やその他の教師の言動及び心の動きを総称して、「不登校(学校恐怖症・登校拒否)のしぶり期」とみることができる。さらに、学校は、しぶり期における子どもや親へ、そして担任への対処をどのようにするかによって、子どもの不登校(学校恐怖症・登校拒否)を未然に防いだり、早期に再適応させることも可能となる。

子どもに不登校(学校恐怖症・登校拒否)の開始の様相があるように、担任や他の教師にも様相がある。しかも、教職経験年数や子どもの理解の深さなどによって対応に違いが生じてくることは言うまでもない。たとえば、親からのたびたび病気を理由とした欠席の連絡に対し、そのままに受け止める担任と、「不登校(学校恐怖症・登校拒否)の前兆ではないか」と敏感に受け止める担任がいる。また、「学校をこん

なに休んでいて、きっと怠けにちがいない」と頭ごなしに決めつける担任や他の教師がいるのも事実である。さらに、保健室に頻繁に通う子どもに対して、「そんな仮病を使ってはだめ。早く教室に戻りなさい」と厳しく声をかけたり、最初から子どもの訴えに耳を傾けようとしないう担任もいることは言うまでもない。このような担任の対応の違いによって、子どもの言動や心は大きく揺れ動き、一過性の不登校(学校恐怖症・登校拒否)で終わったり、ますます子どもの心を閉ざし、しばらくして完全に家庭に閉じこもってしまうこともある。

担任や他の教師が子どもの欠席がしぶり期の始まりか、それとも怠学や本物の身体的疾病かどうかを見極めるための絶好のチャンスが早期にある。それは、多くの場合、親が数日間、電話で子どもの欠席の連絡をしてきた時である。欠席の連絡を受けた時、寝起きや登校時刻の子どもの様子を尋ねたり、欠席したその日の終日の生活をたずねたりすることで、子どもがしぶり期の段階かどうかがある程度わかってくる。不登校(学校恐怖症・登校拒否)の始まりと分かれれば、担任が家庭と連携し、早期に現実的な対処をすることがことができる。たとえば、親と早めに連絡を取り合い、子どもの様相に応じて、できるだけ子どもへの登校刺激を控えたり、逆に積極的に子どもに登校を促しつつ、教室や相談室などでフォローし、混乱期や模索期への移行を未然に防いだりすることができる。

学校側が子どもの不登校(学校恐怖症・登校拒否)のしぶり期の始まりかどうかを見極めるには、以下の子どものその時の様相を参考にすることが効果的である。

「子どもは登校しなければならない時刻になると、とても強い不安を伴う。多くの子どもたちは、家を離れて学校へ向かうことができなくなる。またある子どもたちは、一旦は登校するが、ある不安な状況になり家に帰ってきてしまう。子どもたちの多くは、学校へ行きたいと言っているし、登校のための準備をするが、登校時刻になるとそれができなくなる」(Hersov 1977)。

「不安は、頭痛や腹痛、嘔吐、目眩や発熱な

どの身体症状となって現れ、親や担任のかかわりかた次第で、気持ちが高ぶり、時には衝動的に暴力を奮ったり器物を破損することもある。また逆に、家族とほとんど会話ししないで部屋の中に閉じこもるといった無気力状態が見られる」(Hersov 1977)。

③ 混乱期の理解と対処

しぶり期から次の段階へと移行した子どもたちがどのような様相を示すのかということを家族や担任のかかわりと絡み合わせてみてみよう。

不登校に陥った子どもの多くは、Hersov (1977) が述べているように、前日の夜には、登校の準備をしたり、「明日は必ず登校するからね」と口では言うが、いざ朝になると、起きられなかったり、着替えられなかったり、また、部屋から一步も出ることができず、結果的に登校できない日が毎日のように繰り返されることが多い。このように葛藤する気持ちが周囲に理解されず、ただ登校を強要されたり責められたりすると、トイレに頻繁に駆け込んだり、嘔吐を繰り返したりして必死になって気持ちを訴えようとする。

親が子どもの登校を願い、必死になればなるほど子どもの心や体は不安定となる。たとえば、登校時刻の前後には、あれほど苛立ったり泣いて抵抗したりしていたのに、登校時刻を過ぎ、昼頃になると、別人のように元気を取り戻し、学校に関する話題以外ならごく自然な親子の会話が可能となる。しかし、母親が「これなら大丈夫」と思い、「明日は学校に行けるね」と安易に登校を促す言葉をかけた途端に子どもの表情が急に曇り、一言もしゃべらなくなることもしばしばある。さらに親や祖父母など他の家族が口うるさく言うたびに嫌悪感を増し、会話を避けるため自分の部屋に閉じこもったり、暴言を吐いたり、ひどい時には母親に暴力を奮ったり壁や調度品などの器物を破壊したりすることもある。さらに、家族、特に母親を昼夜関係なく買い物などの使い走りをさせ、まるで召使のように扱う子どももいる。

家族との関係を自ら断ち切るために生活リズム

も昼型から夜型に変わり、遅くまでテレビを見ていたり、興奮状態が続くため、明け方になってやっと寝付くこともある。このような不安定な生活が続くと、次第に無気力になったり、ささいなことをきっかけに家族に八つ当たりしたり、強迫的行動や発作など繰り返したりする。

混乱期の子どもは、学校への嫌悪感が特に強まり、担任や級友の訪問を拒否し、学校からのプリント類にはほとんど関心を示さないことが多くなる。もちろん、内心は登校したいと思っているが、実際に登校しようとするれば、先に述べたように、心や体がまったく受け付けないことが多く、登校出来ないことへの劣等感を強めることになる。このような不安定で緊張した日々の生活の繰り返しによって完全に自分の殻に閉じこもってしまう子どもは多い。

親や他の家族は、子どもが不登校（学校恐怖症・登校拒否）と分かり、脅しや暴力に訴えたり、子どもの欲しい物を交換条件にして必死に登校させようとする。しかし、そのような対応が一時しのぎの空しい努力であることを結果として思い知らされることは多い。結局、力づくでは子どもを登校させることができないことを受け入れるまでには時間がかかる。やがて親の力ではどうすることもできないため、挫折感や敗北感を味わい、藁をもつかむ思いで相談所や病院を訪れることになる。

混乱期の学校としての対処のポイントは、子どもも親も心身共に混乱する時期だけに、子どもの登校にかかわる不安や葛藤の共感的理解と、家庭で日々直接的にかかわる親の心理力動を理解し、不安や焦りを軽減することにある。そのために、担任だけでなく学校の相談態勢による親への早期のはたらきかけが必要となる。たとえば、子どもが「登校したい、だけどできない」といった二つの気持ちが同時にあり、それが朝夕のさまざまな言動となって現れるということを理解し、極力、登校刺激を控えるといった配慮が大切となる。そのため、担任としては、親との面接を継続し、情報交流を行いながら、子どもの様相を具体的に把握し、電話や家庭訪問を慎重に行うことが大切である。さらに、級友による連絡の仕方についても同様に慎重な対

応が必要となる。

学期の途中で子どもが不登校（学校恐怖症・登校拒否）となると、担任の気持ちとして、「私の責任だから早いうちに何とかしなければいけない」といった焦りが先走る。そのため、頻繁に家庭に電話をかけたり家庭訪問を繰り返したりする。このような抱え込みや焦りが、時には子どもや親への行き過ぎた言動となって現れることもある。担任の善意が子どもや親にとっては重荷に感じられ、結果として学校と家庭との心のパイプが切れることもしばしばある。このようなことを極力避けるためには、学校としては、担任だけに任せず、早期に教育相談委員会等に諮り、全職員の共通理解と直接的または間接的な協力が得られる態勢を整えることが大切となる。

親が子どもの欠席理由を問い詰めた時、子どもが担任や学校への嫌悪感、担任批判、級友のいじめといった学校場面の出来事を理由として挙げることが多い。そのため、親は「子どもが登校できないのは学校、特に担任のせいだ」と感情的に受け止め、表面的には担任や学校側のはたらきかけに応じながら、内心は担任不信や嫌悪感から学校批判の気持ちを強めることが多い。逆に、担任や他の教師に相談したくても、子どもが登校していないことで親の養育姿勢を批判されるのではないかという不安から、自信を喪失し、学校側のはたらきかけに消極的となることもある。このような親の不安や葛藤、本音を早い時期に受容し、共感することで、家庭と学校の信頼関係を回復し、学校と家庭が相互に連携を図りながら子どもに対処することがとても大切となる。そのためには、親からの連絡や相談を待つのではなく、担任や相談委員会から親に早期にはたらきかけ、相談の場を設けることが必要である。

④ 模索期の理解と対処

子どもの欠席が長引き、まったく登校意欲がみられないということや、力づくで登校させることができないことが実感できるようになると、親も無気力状態に陥ることが多い。食事や他の日常生活場面で、親子の会話は減り、不登

校の子どもは兄弟姉妹の話し合いに入れず、孤立状態となることが多くなる。そのような息詰まるような雰囲気中でも、子どもは次第に自分なりの生活リズムを整えて活動をし始める。たとえば、テレビゲームに熱中したり、好きな音楽をかけて一日中自分の部屋に閉じこもったりする。家族の心配をよそに自分だけの世界に入り込み、周囲から見れば独り言や空笑と思われることもある。

一見くつろいでいるように見える子どもの内心には、まだまだ「登校しなければ」「悪いことをしているのだ」といった登校へのこだわりや罪悪感がある。親や他の家族が、思い余って「テレビばかり見てだめよ。たまには勉強もしなさい」「長いこと休んでいると高校へ行けなくなる」といったことばをかけたとたん、子どもの表情が硬くなり、混乱期に見られた暴力の再現になることもしばしばある。

担任や他の教師の子どもに対するかかわりかたについても同様のことが言える。たとえば、それまでは、夕方や放課後に家庭訪問をして、子どもの興味や関心のあることを話題にしている時は、表情も柔らかくなり、ごく自然な会話やゲームを一緒にできる。そのため、「これならそろそろ学校に来るように言っても大丈夫だろう」と思い込み、子どもが好きな科目の授業に誘ったり、レクリエーション、修学旅行や社会見学などの楽しい行事への参加を積極的に促したりする。さらに、進学や進級をネタに学期ごとのテストを受けるようにはたらきかけたりする。このことで、教師が帰った後、急に不機嫌になったり、時には親に暴言や暴力を振るうこともある。

親や教師の「子どもを学校に行かせたい（来させたい）」という強い思いによる積極的な登校を促すはたらきかけが、とすれば逆効果となることが多い。そのため、学校としては、子どもや親が再び混乱期へと戻ることがあることを十分理解しておかなければならない。

逆に、子どもの「いま、ここで」の気持ちや、学校に行く、行かないことの自己決定、今、子どもが自分で取り組んでいることなどの自発的行動を最優先し、登校に向けたはたらきかけを

控えることで、家族の間にごく自然な会話や子どもの自発的な活動が始まることもある。たとえば、朝夕の食事の準備や日常生活の中で母親が頼んだ手伝いをごく自然に行ったり、テレビやラジオの情報について親子の話が弾むこともある。

また、あれほどまで避けていた父親とも歓談できるようになるなど、子どもと他の家族の間で少しずつ心が通い始める。このような状況が生まれてくると、子どもと担任や級友との関係も回復され、放課後に友達と遊んだり、担任が家庭訪問した時にも顔を出したり、担任からの問い掛けに時には受け答えができるようになってくる。しかし、自分が長い間欠席したことで不安や緊張感は強く、平日は家庭から一步も出ようとしないうちもいる。

担任は、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の子どもの他に学級の子どもをかかえおり、授業や会議など職務に追われ、つつい家庭訪問の足が重くなる。担任の訪問が途絶えてしまうと、「今日の夕方、ご自宅に伺いたいのですが」と電話でたずねても、「今日は都合が悪いので」と母親からの側から訪問を拒否されることもある。さらに中学3年の担任は、子どもの進路指導の方向が見えず、「今のままでは高校は無理ですから、ぜひ登校させてください」と親に登校を促すこともある。しかし、このような対応が、かえって子どもや親の不安や担任不信を強めることになる。

そのため、模索期は、何よりも子どもの自立に向けての動きや気持ちを尊重し、見守る姿勢が大切となる。もちろん、このことは、担任が家庭訪問を中断したり学校からの連絡などを一時期控えることであり、けして子どもや親との関係を完全に断ち切ることを言っているのではない。

子どもが家庭での閉じこもりが長期化するほど、親は学校に相談や連絡することに億劫になる。そのため、学校としては親と定期的に相談の機会を設けたり、学校からの連絡の中に担任の気持ちや学校の様子、時には、同世代の子どもの作文や詩などをそっと添えて届けることも大切な配慮と言える。さらに、閉じこもり

の時期が半年から1年以上にも長引く場合は、校内に配置されているスクールカウンセラーや子ども相談センターのスタッフと連携を図ることが有効である。さらに、地域の教育相談機関や時には医療機関への相談を促すことで、親が落ち着きを取り戻したり、子どもの自身の来所や通院が可能になったりすることもある。とにかく学校のみでの対処に固執せず、家庭との良い関係を保ちながら、このような専門機関と連携したり、時には相談を委嘱することも学校として果たすべき大切な役割である。

⑤ 回復期の理解と対処

回復期の子どもは、家族関係も次第に回復し、子どもの気持ちや自主的活動をそっと見守ろうとする家族の温かなかわりが、子どもの活動意欲を発現する。たとえば、新聞やテレビの情報に敏感になったり、担任や家族との話しにも参加したりする。さらに外出できなかった子どもが、親の随伴で平日でも人通りが少ない場所や学校と無関係の場所に1人で出掛けることができることもある。起床も次第に早まり、体を動かすことにも意欲的となる。学習の遅れを心配し、それまで手にしたことがなかった教科書やプリント類にも目を通し、あれほど嫌がっていた塾にも出かけることもある。

子どもの自主的活動や自信の回復は、親の心の回復の時期でもある。子どもにさほど気を使わずに外出や会話ができるようになったり、家族の同士の張り詰めた気持ちや緊張感がほぐれ、本来の生活リズムを取り戻したりする、しかし一方で親の内心は、「果たして再登校してくれるだろうか」「こんなに家では元気なのにどうして学校へ行くことができないのだろう」と、子どもの再登校に対する不安はとても強い。そのため、回復期には以下のようなことを押さえて、子どもの状態像の把握と親の不安の軽減を図ることが学校の対処のポイントとなる。

- a. 子どもの状態像をできる限り把握し、登校意欲や進路変更の意志を確かめる。
- b. どのようなかわりで登校させるかを家庭や相談機関との連携の中で検討する。
- c. 学級及び学校として受け入れるための基

本的態勢や役割を全職員が共通理解する。

- d. 学習面の遅れを取り戻すための個別学習の機会なども考慮する
- e. 子どもを取り巻く教育環境の見直しを家庭と連携をしながら行う。

⑥ 自立期の理解と対処

回復期を過ぎ、不登校（学校恐怖症・登校拒否）の子どもが現実には直面しようとする時期がやってくる。それが、再登校や進学、就職、または、進路変更といった動きとなって現れる。もちろん、そこまでの道程は個人によってさまざま、ここでは、小中学生と高校生の場合を想定して、自立期における子どもの状態像及び周囲のかかわりかたについて述べることにする。

自立期の兆しは、さまざまな形で現れる。たとえば、友達や学校のことに少しずつ関心を持ち始めたり、担任や友達の電話や訪問にも次第に自分から応対したりする。また、これまで休日以外に家族とも外出しなかったのに、放課後、学校や地域に遊びに友達と一緒に出かけることも可能になる。

家族の間の会話も増え、過去の学校のできごとや今後の行事を話題にすることもある。生活スタイルも夜型から元のように朝型になり、食欲も出てくる。さらに、床屋や買い物に自分で出かけたり、会話のぎこちなさが次第に取れ、自分の意志や感情をストレートにことばで現すこともある。

さらに、「学校へ行きたい」とか「学校へ行ってみようかな」と子どもが言い出したり、親が「登校してみたらどう？」と何げなく登校を促したことで、再登校するチャンスが訪れることがある。中学生では、学校に対する嫌悪感が拭えず、他の中学校に転校し、そこで次第に自信を取り戻し、現実場面に直面し始める子どももいる。子どもは、登校するかどうかを自分で決めるようになり、「今日は行かない」とはっきり意志表示するようになる。

もちろん、すべての子どもが学校に再登校したり、学級復帰をしたりするわけではない。学校の相談室や地域に設置されている適応指導教室、さらに、民間の不登校の支援施設に通い始

め、そこで同じような体験をした人と共に学習や生活をする。そして、高校や大学への進学など、これから先どのように生きていくかを現実的レベルで真剣に考え歩み始める子どももいる。

このように元の学校への復帰や新しい環境に積極的に適応しようとする子どもに対し、親や教師はどのように対処すればよいのか。親の中には、突然、再登校し始めたわが子の成長に喜びながらも、それまでの長く苦しい時期からの急変だけに、子どもの変容に戸惑うことが多い。そして、「元に戻ってしまうのでは？」と腫れ物にさわるように気を遣いすぎることもある。また、再登校し始めた子どもが1～2週間程して、急に体調不良を訴えたり、しぶり期の言動が再現されても、親は子どもの訴えを受け入れ、リフレッシュタイムと考え、大目に見ることができる。

IV 面接場面における心理力動的接近

1. 親の心理力動の変容と対処のポイント

不登校（学校恐怖症・登校拒否）の母親と面接を継続していくと、子どもの心の動きと呼応するように母親の心も大きく揺れ動くことがわかる。

たとえば

- a, 初回面接で子どもへの対処の仕方が分からず、強い不安を訴える母親
- b, 細かいメモをもとに子どもの様子を語る母親
- c, 子どもが登校できないのは担任のせいと決めつけて話す母親
- d, 子どもが自立するまで待つと訴える母親
- e, 家庭内の問題として考え始める母親
- f, 小さいときの自分のかかわりの問題と考え始める母親
- g, 子どもの成長の過程と考える母親

といったように、面接場面の母親の様子の特徴や様相が次第に変化していくことが多い。

しかも、母親の様相の変化に伴い、子どもへのかかわりは大きく変わってくる。もちろん、最初は戸惑いや不安が見られたが、3～4回の面

接を継続する中、次第に我が子の不登校の現実を受け入れたり、子どもの荒れる様子を冷静に見れるようになる母親が大半である。もちろん、母親の中には、これ以上、夫婦関係や家庭の深刻な問題に深入りされたくないといった気持ちから強い抵抗が見られることもある。このような事例の場合は、母親も家庭に閉じこもり状態となり、学校からの相談の呼びかけに応じなかったり、面接の中断をしたりすることが多い。

ここに紹介する不登校の子どものBの母親のことばかり、不登校の子どもをかかえる親の不安や葛藤を浮き彫りにすると共に、継続的面接によって親自身が自分の心と向かい合い、自ら心の成長に気づいていく様子を伺うことができる。

2. 事例K（小4）に対する心理力動的接見

① 事例の概要

<主訴>

不登校（学校恐怖症・登校拒否）：6月に入り、腹痛、発熱を繰り返し、学校に登校できなくなる。

<家族>

父（40代）母（30代後半）姉（中3）。母親は子どもに受容的にかかわり、子育てに専念してきた。子どもの養育について出きる限り自分で前向きに取り組もうとしてきた。父親は会社の仕事に従事しながら、家庭では物わりの良い父親を演じてきた。

<生育歴>

他県で生まれ育ち、父親の仕事の都合で本県に幼児の時、転居してきた。乳児の時、大病を患い入院し、母親が付きっきりで世話をした。外に出て遊ぶことよりも、折り紙が好きで、母親の側で楽しく作ることが多かった。

<来談経緯>

学校から相談依頼があり、校長同席の元、校長室で父母と出会う。Bの不登校原因が担任の指導上の問題（厳格）であることが校長から話される。その後の相談は親の方で一任され、地域の相談室で面接を行うことになった。

② 面接経過

第Ⅰ期：混乱期 #1～#2

初回面接（母親面接）

「普通と変わらないのに何で行けないのか、生活は普通で、家にいるときはいつもと同じようにしている。私も気がつかなかった。何もない子、明るい様子だったので・でも、2ヶ月間は家でも暗くて何も話さなかった」

2回目面接（母親面接）

「家にいる時、なぜ行けないのか、こんなに元気なのに。担任の先生からの手紙は見ない。子どもに勧めていいのかな、どうしていいのかな。みんなから忘れ去られるのが怖い」

第Ⅱ期：模索期 #3～#10

3～4回目面接（母子合同面接）

・遊戯療法。折り紙に始まり、次第に大きな声で自己表現する。

5回目面接（母子並行面接）

「夜、主人ともめた。いつまで続くのこの状態が。私はいつも一緒、主人は逃げ、お父さんどんなつもりなの？・忙しい・親の方も焦りがある」

6回目面接（両親面接）・・父親は学校のこれまでの対応に不満

7～10回目面接（訪問面接）

・家庭訪問による遊戯療法。B中心に家族が動き、自己主張もする。

第Ⅲ期：回復期 #11～#18

11～12回目面接（訪問面接）

・休み中の登校練習。級友や担任、他の教師とかかわる。

13回～18回目面接（随伴）

・随伴登校

第Ⅳ期：自立期 #19～#23

19回目面接（母親面接）

「今思えば、自分のこれまでの育て方を否定することがつらかった。子どもとのかかわりより、自分とのかかわりがとても苦しかった。校長先生の『学校へ行かなくていいよ』ということばは、親にとってもとても救われました。どうしても行かなければならないとなると、口やかましくなる。言葉づかいに変化が起きた。本人に任せられる。結果はどう

あれ子どもの問題としてみれる。回り道のようで、親も子どもも性格を変えることが最も近道に思えるようになりました」

20 回面接（両親面接）

父：「不登校は家庭が弱いからと言われた。そのように育て方をしたのかな。親としての当たり前のことをやったまで。最近読んだ本で、逆の生き方もあると気づいた。親が行かなければ行かなきゃいかんと、それは錯覚ではなかったのか。一方に学校へ行くことが普通という見方がある。行かないことで訴える子どもを守らなければ。きっかけは学校でも、それが解決してもダメなのではないのか。行かなきゃいいかというと、妻は『そんなこと』と言う。私は自身はふっきれた気持ちになっている」

21 回目面接（母親面接）

- ・随伴登校開始 その後は母親の意図的分離の試みが始まる。

22 回目面接（母親面接）

- ・母親突然来談

「一時は行かなくてもいいと思っていたが、この子も今の仲間の子と将来社会を構成する・・・だからこの中に入れてやらなければ、これからは逃げられないと思うようになりました。以前は、この子一生世話をして生きようかと考えたこともあります。学校へ行くことを決めてからは毎日が喧嘩ばかり、反発がものすごく返って来る。あの子との戦いでたくましくなってきた。私と喧嘩をやるのがこの子には無かった。それが今かと思う」

23 回目面接（母親面接）

「不登校も長くなると、だんだん今しなければならぬことや必要性のあることが見えて来た。随伴登校を無理やりやらせていいのか、形から先へ押し込めることより、自分の意志を尊重せよと本には書いてある。でも自主性を待っていると中高生となっていく。いつまでもたっても危機感がとれないと考えるようになった。待っているより形から押し付けないとだめと思い始めた。

いいのだろうか、いつ私から離れるのかと思っていたが、今は夢みたい。ものすごく時

間にかかるけれど、今日、この日から突然にということはありません。砂粒みたいに少しずつ積み上げて行く。家にこもっていた時は、怖くなって私の中に逃げ込んだと考えた。10ヶ月はみなければと、もう一度生み直すつもりで、10ヶ月経って、外へ出さなければと考えた。負い目が親にあるから、親が言えないときは子どもも同じように負い目を持つ。居直った時にやっと原点に立てた。電話で口ごもったり、気を使い過ぎる時があるが、それが先生が言われる、まさに親も混乱期だったと今になって思う」

③ 考察

事例Kの母親や父親との継続的面接で、特に母親が語ることばの中から母親自身の心の動きが移り変わっていく様相がよくわかる。我が子の不登校が突然始まったことの不安な気持ちと、引き金となった担任への怒りが交錯するように語られている。やがて、母子が一緒に相談室に来所し始めて、改めてこれまでの親子のかかわりの振り返りが始まる。当初語られた担任や学校に対する怒りは静まり、夫に対し激しい感情がぶつけられていく。夫が面接場面に登場することで、夫婦でズレがあるものの、共に我が子にかかわろうとする姿勢が生まれてきた。子どもがあれほど恐怖心をいだいていた学校に、周囲の支えで復帰し始めると、母親の子どもへのかかわり方や不登校の意味についての洞察はさらに深まっていくのがわかる。結果として子どもが自らがこれまで作り上げられた自己像をうち破り、自立していくことになる。

もちろん、ここまでの洞察に至るには、相談場面において単に受容的姿勢だけでなく、以下のようなきめ細かな対処のポイントがあるように思われる。

- a. 親の訴えをありのままに受け入れる
- b. 直接的きっかけを明らかにする
- c. 生育歴まで深く振り返る
- d. 親子関係を見直す
- e. 子どもの側に立って歩む
- f. 子どもの自己表現力を伸ばす
- g. 地域の活動に参加を促す

h. 学校と家庭が連携する

終わりに

最近読んだ不登校に関する著書の中に、実に興味深い内外の不登校（登校拒否）に関する実態調査を掲載したものがあった（Kearney et al., 2004）。その概要は以下の内容である。

Granell de Aldaz et al (1984) は、欧米や日本、その他の国々の登校拒否（不登校）に関する文献を検討し、登校拒否（不登校）の発生の割合が、調査対象人口や、対処法、定義の基準によって様々で、0.01%～2.5%というように異なることを明らかにした。

ベネズエラ (Granell de Aldaz et al, 1984)

3歳～14歳までのベネズエラの幼稚園（就学前）や学齢期の子どもたちの研究の中で、登校拒否の発生を評価するための基準の1つの範囲を用いた。不登校と共に恐怖についての子どもの訴えの基準を使った時、発生率は1.2%であった。

アメリカ (Ollendick & Mayer, 1984)

学齢期の子どもたちの登校拒否の発生を調査するため、Berg, Nichols, Pritchard (1969) の基準を用い、0.4%の発生率が見られた。

イギリス (Karn, Nursten, & Carroll, 1996; Burke & Silverman, 1987; Hersove, 1985)

英国とエールにおける1973年の子どもたちについての調査では、調査期間中に登校拒否を理由に1.3%が欠席した。全体としては、学齢期の子どもたちの1%～2%のどこかに登校拒否が位置するように思われた。臨床的に報告された青少年の間では、登校拒否の発生率の初期の評価は、5%当たりで、中学生で高い。

オーストラリア (MCShane, Walter, and Rey, 2001)

オーストラリアでは、青年期の登校拒否の事例は、心の問題をかかえる子どもの7%を占めている。

日本 (Kasahara, & Ohtaka, 1992, p.29)

日本では、18歳以下でクリニック外来の青少年のほぼ16%はなんらかの心理学的原因のために登校できない。

以上のように、子どもたちの不登校の発生率や開始時期に共通した側面と国による独自性が指摘されている。

2つ目は、不登校の増加が意味することについての考え方である。かつては、不登校の子ども数が増加する理由として、Gordon and Young (1976) が「その問題や対処の傾向について一層関心が持たれるようになったことの現れで現れである」と指摘したように社会的関心の高まりとして解釈されてきた。しかし、Kearney et al (2004) は、本城や笠原など日本の論文も取り上げながら、不登校が明らかに増加していることを指摘している (Honjo, Kasahara, & Ohtaka, 1992; Iwamoto & Yoshida, 1997; Kameguchi & Murphy-Shigematsu, 2001; Ollendick & Mayer, 1984)。

3つ目は、不登校発生のピーク時期と学齢期との対応についてである。不登校は確かにすべての学年齢で発生しているのは事実であるが、Kearney et al (2004) は、Hersove (1985) や Last and Strauss (1990)、Last (1992)、Kearney, Eisen, & Silverman (1995) の報告を基に、5～7歳、11歳、14歳と、初期の学校教育、学校の変化、そして、義務教育の終わり近くに各々が対応していることを述べている。

以上概観したように、不登校問題は、今や国際的レベルで子どもの心の成長及び発達にかかわる重要な問題であることがわかる。

日本においても不登校は、今や思春期や青年期の子どもにかかわる深刻な問題の一つと見なされている。一方で、日本で一部の人たちによって不登校の症例に関心が持たれ始めてから半世紀の歳月が過ぎようとしている。しかしながら、イギリスにおける「教師の関心事」といった発想とはほど遠い次元で多くの年月が費やされてきた。そのため、学校や相談機関及び医療機関等、不登校の子どもや親にかかわる多くの人々の不登校の理解の仕方や対処の仕方が混沌としたものであることは否めない。

さらにまた、子どもが学校に行くことを心身の様々な症状で拒否するといった行動を、単

に「non-attendance」(不登校)といった大きな概念で包み込むことで、かえって子どもの心の動きや行動の仕方の違いが見えにくくなってきたことも事実である。国際的には寺田(2006)が指摘したように、「school refusal」や「school phobia」といった用語が主流となっているのが現実である。日本が国際的に不登校問題から孤立しないためにも、学校場面で現在用いられている「non-attendance」(不登校)の概念を見直し、子どもの状態像を基に、現実的で有効と思われる多様なアプローチを活用する時期に来ているのではないかと考える。

本論文では、以上のような不登校問題にかかわる日本の今日的課題を念頭に置き、特に、子どもの心の動きの理解に基づく理解と対処のあり方について述べてきた。今後は、さらに、子どもにかかわる教師の心の動きも含めた心理力動の理解と対処のあり方について考察していきたいと考えている。

参考・引用文献

- Blagg, N.R 1989 School phobia and its treatment. Reprint by Routledge.
- 藤岡孝志 2005 不登校臨床の心理学. 誠信書房.
- 古市裕一 1995 文献解題(学術編) 登校拒否のすべて. 第一法規出版.
- Hyne,D., & King, N.,j. 2004 Treatment of school refusal. In Barret, P.M. & Ollendick, T.H. Interventions that work with children and adolescents :Prevention and treatment(Chapter 11;pp.243-272).John Wiley & Son Ltd.
- 池田博和 1993 不登校生徒に対するグループ・アプローチ. 東海心理学会第42回大会発表論文集.
- 稲村 博 1988 登校拒否の克服. 新曜社.
- 稲村 博・今井五郎 他編 1991 - 1993 登校拒否のすべて. 第一法規出版.
- 河合 洋 1986 学校に背を向ける子ども. 日本放送出版協会.
- 河合伊六 1991 登校拒否 再登校の指導. ナカニシヤ出版.
- 菊池 章 1995 登校刺激と登校再開期の対応. 登校拒否のすべて. 第一法規出版.
- 小泉英二編 1973 登校拒否. 学事出版.
- 小泉 英二 1980 続登校拒否 - 治療の再検討 -. 学事出版.
- 國分康孝, 門田美恵子 1996 保健室からの登校. 誠信書房.
- 文部省 1983 生徒の健全育成をめぐる諸問題 - 登校拒否問題を中心に. 文部省生徒指導資料第18集, 中学校・高等学校編.
- 文部省 1992 登校拒否(不登校)問題について. 文部省・学校不適応対策協力者会議.
- 文部科学省 1990 - 2006 学校基本調査速報・不登校, 内外教育. 時事通信社.
- 内藤勇二 1997 登校拒否の学校要因. 登校拒否のすべて. 第一法規出版.
- 長岡利貞 1990 欠席と欠席率. 登校拒否のすべて. 第一法規出版.
- 小野 修 1985 親と教師が助ける登校拒否の成長. 黎明書房.
- Rajinder M.Gupta et al 1990 Intervention with children. Routledge.
- 佐治守夫・神保信一編 1979 登校拒否, 現代のエスプリ. 至文堂.
- 佐藤修策 1996 登校拒否ノート. 北大路書房.
- 神保信一 1996 文献一覧と解説. 登校拒否のすべて. 第一法規出版.
- 田畑 治・蔭山英順・小嶋秀夫編 1992 現代人の心の健康. 名古屋大学出版会.
- 寺田道夫 1993 子どもの登校意欲を促すよい関係づくり～登校拒否指導教員として～ 東海心理学会第42回大会発表論文集.
- 寺田道夫 1994 登校意欲を促すための早期対処のありかた～登校拒否児指導教員の立場から～ 東海心理学会第43回大会発表論文集.
- 寺田道夫 1994 教育現場における登校拒否の対処 臨床心理学とその近接領域9.
- 寺田道夫 1994 登校拒否児への対処～

- Blagg,N(1989)の学校教育相談への示唆～岐阜大学教育学部障害児教育実践センター年報第1号.
- 寺田道夫 1996 登校拒否への対処～相談室の窓から～不破郡教育研究会論文集.
- 寺田道夫 1998 登校意欲の発現を促すための早期対処のあり方5～学校とのよい関係～東海心理学会第47回大会発表論文集.
- 寺田道夫 1999 登校意欲の発現を促すための早期対処のあり方6～しぶり期の子供への対処～東海心理学会第48回大会発表論文集.
- 寺田道夫 2000 登校意欲を促すための早期対処のあり方7～保護者（家庭）と学校との良い関係づくりの回復を核にして～東海心理学会第49回大会発表論文集.
- 寺田道夫 2001 登校意欲を促すための早期対処のあり方8～風景構成法に診られる子供の意欲発現の様相～東海心理学会第50回大会発表論文集.
- 寺田道夫 2002 登校意欲を促すための早期対処のあり方9～子供の心が解ることで良い関係は生まれる～東海心理学会第51回大会発表論文集.
- 寺田道夫 2003 登校意欲を促すための早期対処のあり方10～キーパーソンを支えるための力動的相談態勢～東海心理学会第52回大会発表論文集.
- 寺田道夫 2004 登校意欲を促すための早期対処のあり方11～力動的相談態勢を活かす～第53回東海心理学会発表論文集.
- 寺田道夫 2005 登校意欲を促すための早期対処のあり方12～校内の力動的相談態勢を活かす～第54回東海心理学会発表論文集.
- 寺田道夫 2006 登校意欲を促すための早期対処のあり方13～校内の力動的相談態勢を活かす～第55回東海心理学会発表論文集.
- 梅垣 弘 1996 登校拒否の相談指導 篠原出版.
- 渡辺邦雄 1993 教育行政と不登校. 不登校：心の科学 51. 日本評論社.
- 吉村英雄 1988 登校拒否の経過モデル：教育心理. 7. 日本文化科学社.

資料 1 不登校の各段階に応じた対処モデル（理解と早期対処のポイント）

段階	教職員の対応の様子 (担任・他の職員)	しづり期から自立期までの子ども様子 (学校場面・家庭場面)	家庭の親の対応の様子	望ましい学校の対処 (担任・全職員・相談係・委員会・SC)
① しぶり期	不登校の前兆に気づかない□ a. 欠席理由を届け出るままに受け止める□ b. 保護者に連絡し、欠席を促す□ c. 欠席理由を聞き、欠席を促す□ d. 欠席理由を聞き、欠席を促す□ e. 欠席理由を聞き、欠席を促す□ f. 欠席理由を聞き、欠席を促す□ g. 欠席理由を聞き、欠席を促す□ h. 欠席理由を聞き、欠席を促す□ i. 欠席理由を聞き、欠席を促す□ j. 欠席理由を聞き、欠席を促す□	【学校場面】 a. 遅刻・早退・断続欠席が増える□ b. 特定教科の欠席・欠席が増える□ c. 保護者に欠席理由を伝える□ d. 成績低下や学習意欲が減退する□ e. 部活動やクラブ・委員会を退席する□ f. 友達と口をきかず孤立気味になる□ g. 集団活動に参加しなくなる□ h. 忘れ物やばややりすることが増える□	【家庭場面】 a. 朝、悪心、腹痛、頭痛を訴える□ b. 起床や身支度が遅くなる□ c. 学校嫌、つまらないと言う□ d. 友達批判やいじめられると言う□ e. 帰宅すると疲れたかきこむ□ f. 部屋で何もせず閉じこもる□ g. 家族と話すことをしなくなる□ h. 家族と話すことをしなくなる□ i. 家族に暴力を振るう□	a. 不登校の前兆のポイントを知らない□ b. 欠席時の様子を聞く(朝・昼・夜・休日)□ c. 身体症状以外の状態像から段階を把握する□ d. 不登校の前兆と判断できたら家庭と早期に連絡を取り、家庭や学校での様子を交流する□ e. 相談係や相談係に早期に伝え、校内での取り組みや親との連携の仕方を検討し実行する□ f. 該当の子どもの意向的かつ自然にかかわる□ g. 疲れを訴えられ保健室や相談室で即時対応する□
② 混乱期	a. 体位に異状がないと分かれ、甘え、わがままと見なし、強引に登校させるよう努める□ b. 保護者に無理矢理、連れてくるよう促す□ c. 登校させられ、保護者を罵下す□ d. 自分や級友を訪問させ、登校を約束させる□ e. 会えないうちに無理に部屋に入り、話す□ f. 子どもの保護者の問題に入り、話す□ g. 責任を感じ、一人で悩んだり抱え込む□ h. 親子の混乱状態に気づかず、そのままにする□ i. 困ったと思って対応できないでいる□ j. しばらく様子を見てみる□	【学校場面】 a. 前夜に登校の準備をするが起きられない□ b. 朝は嫌み反応があるが午後には元気になる□ c. 家族や教師に心理的に攻撃され苦痛を感じたり、必死に抵抗したりする□ d. 親の随伴登校を拒否する□ e. 家族と食事や会話をしない□ f. うるさ言われ声高になり暴力を振るう□ g. 登校する兄弟に後援したきさを感じる□ h. パジャマのまままでいようとしていない□ i. 登校の準備は一切しやうとしていない□	【生活】 j. 不規則な起床時刻、昼夜逆転する□ k. 登校に自信を無くし劣等感が強まる□ l. 周囲に理解されず不満が強まり、言動も荒くなる□ m. 人目を気にしたり、部屋の中を何度も動き回ったり、夜寝付かれない□ n. 不安の言動がみられる□ o. 感情の起伏が激しくなる□ p. 母親や兄弟に攻撃的言動がみられる□ q. 家族を避ける□ r. 日常生活は混乱し、洗面・歯磨きもしない、風呂も入らない□ s. 外出を嫌がり、理容にも行かない□ t. 好きなことを毎日繰り返して行う□ u. 平日は学校のことを気にしている□ v. 土日は、祭日や夕刻に外出でいる□ w. 1. 学年末や学期末、始業時期に不安が高まる□	a. 登校したくてもできない気持ちがある(分&解)□ b. 親の随伴を促したり認めたりする□ c. 安心して休むように伝える□ d. 家庭との連絡をこまめに行う□ e. 電話、手紙、訪問は子どもの状態をふまえて根気強く行う□ f. 担任、学年部、相談委員会、全校で共通理解を図り、中心となる人を決めて対応する□ g. SCや専門機関と情報交換を行い、対応への助言を得たり、きめ細かな連携をしたりする□
③ 模索期	多忙を理由に欠席の子どものかわらない□ a. 訪問や電話を拒否され、戸惑い、放置する□ b. 卒業や進級を条件に登校を促す□ c. 電話や訪問をしない□ d. 診断書(高校)と一緒に休学届けを出させる□ e. 保護者との話し合いの場を設けようとしていない□ f. 他の職員とSRのこを話題にしない□ g. 対応の仕方が分からず悩む、無気力となる□	【生活・家族・対学校】 a. TVやゲーム、漫画や音楽に没頭する□ b. 一見、落ちた様子で一日過ごす□ c. 家族との会話や会話がなくなる□ d. 勉強や学校のことを話題にしない□ e. 担任や級友の訪問、電話を回避したり受け入れられない□ f. 将来への不安や焦りは強い□	a. 登校を強要しなくなる□ b. 将来への不安から勉強や進路変更を勧めめる□ c. 手伝いや訪問者への対応をさせたり自発性に任せてみる□ d. 今の行動を理解し見守る□ e. 担任に見放されたという不安を持つ□ f. 長期欠席となり学校に相談に行きづらくなる□	a. [忘れていない]気持ちを伝える□ b. 直接又は級友を通じて連絡をとる□ c. (電話・手紙・訪問) d. 良い関係づくりのため本人の興味を理解し、見守り育てようとする気持ちを持つ□ e. 登校刺激を控える□ f. SCや相談機関に相談し、助言を求めたり、校内の委員会等でこれまでの対処の経過や今後の対処について検討したりする□
④ 回復期	自宅学習や遊びの様子から登校刺激を早急に与えようとする□ a. 家庭で元気のない、なぜ登校しようとしていないの理解できない□ b. 登校を促す□ c. 登校を促す□ d. 登校を促す□ e. 登校を促す□ f. 登校を促す□ g. 登校を促す□ h. 登校を促す□ i. 登校を促す□ j. 登校を促す□	a. 朝しい級友と一緒に遊ぶようになる□ b. 学校のことを話題にして話せる□ c. 家族や担任、級友に自分の気持ちを話せるようになる□ d. 相手の気持ちを理解したり、話を素直に聞いたりできる□ e. 再登校への意欲や意志を表す□	a. 子どもなりに成長していると感じ止め、自発性を伸ばす機会を増やす□ b. 子どもの動きに任せようとする□ c. 子どもの動きに任せようとする□ d. 子どもの動きに任せようとする□ e. 意欲が出れば学習は大丈夫と考える□ f. 学校を信頼し連絡や相談を積極的にする□	a. 学校・家庭・相談員と連絡を密にし、登校刺激のタイミングを検討する□ b. 再登校に向けて環境チェック等の準備をする□ c. 学校や校内の受け入れを共通理解する□ d. (温かく・きりなく・偶発的に・迷わず)学習の遅れの心配をたずね、安心して登校できるように配慮する□
⑤ 自立期	再登校した子どもに気づかない□ a. 特別扱いし、他の子どもの反応を扱う□ b. 部分登校(時差登校など)・随伴登校に満足できず、完全な登校を求める□ c. 再登校した子どもの学校滞在時間を増やそうとする□ d. 子どもの学力の遅れを気にする□ e. 宿題や部活動など他の子どもと同じように取り組ませようとする□	【学校・学校場面】 a. 再登校し、一見明るく振る舞うが、とても緊張し、周囲の言動や雰囲気を感じて不安になる□ b. 職員用の玄関から入り、教室に直接入ることには抵抗したり、戻りたくない□ c. 相談室や保健室から抵抗なく入る□ d. 少数の級友としかかかわることができない□ e. 登校した日は多分になり落ち着かない□ f. 相談室や保健室から積極的に外に出る□ g. 相談室や保健室で給食を食べる□	a. 再登校に不安を持ち神経過敏となる□ b. 朝送り出しはしつとすると毎日が続く□ c. 次第に子どもへの信頼感が増す□ d. 少しずつ母子分離を心がける□ e. 家族の自然な会話を増やそうと努める□ f. 子どもの自己主張に耳を傾ける□ g. 外出や外食の機会を増やす□ h. 子どもの意志や自己決定を大切にすること ¹⁾ 再登校を恐れ、時には不安になる□ i. 担任などの子どもの様子を時々たずねる□	a. 担任を始め全職員で温かく見守る□ b. (声かけ・かかわり・指導・支援の配慮) c. 子どもの疲れや再発の兆しをキャッチする□ d. 家庭と連絡をこまめにし良さを伝える□ e. 学校内の学習や生活、特別活動で仲間との取り組みを見守り認め、意欲を発現させる□ f. 学級後援後も6ヶ月ほどは継続的にケアを続け、不登校の再発を未然に防ぐ□